

序論 問題の所在

0-1 茶の風景

茶という言葉は現在の私たちの生活にとって、「日常茶飯事」というように、ごく当たり前のものである。ペットボトルや缶のお茶を含め、1ヶ月間茶をまったく飲まない人はほとんど皆無であろう。茶を使った言葉は、ほかにも「お茶の子さいさい」、「茶飲み話(友達)」、「空中茶館¹⁾」など枚挙に暇がない。

周知のごとく茶は、中国原産のものであるが、世界中に普及しており、17世紀以降遠くヨーロッパでも飲まれていた。彼の地では、ワインが古典医学や聖書に基づく正統性をもった飲み物として、まずあげることができるだろう⁽¹⁾。それに比べると、ヨーロッパ人にとって、茶は生活必需品とはいえず、オリエンタリズムをかきたてる存在にすぎなかった。

では、ヨーロッパ人が東洋諸国を訪問したとき、彼らの目に映ずる飲茶の風景はどのようなものであったであろうか。例えば中国旅行記として最初に想い込まれるのは、マルコ・ポーロ(Marco Polo 1254-1324)の『東方見聞録』であろう[マルコ・ポーロ 1298: 468]。しかしながら、14世紀初頭に書かれた『東方見聞録』には、残念ながら茶に関する記述がみられない⁽²⁾。13世紀後半にヴェネチアで生まれたマルコ・ポーロは、はるばる中国^{キタイ}に旅しながら、茶を見たことも聞いたこともなかったのであろうか。

マルコ・ポーロから200年ほど後、ポルトガル人のドミニコ会修道士ガスパール・ダ・クルス(Gaspar Da Cruz 生年不詳-1570)がその『中国誌』で、茶について、「赤みがかって生温いたいそう薬効のある湯で、尊敬すべき人々の間で供される」と指摘している⁽³⁾。ここで興味深いのは、茶が特定の人々の間で供されると述べられていることである。

18世紀末、中国の清王朝の時代に重大な政治的任務をおびて中国を訪れたイギリス使節ジョージ・マッカートニー(George MacArtney 1737-1806)は、茶についてもより切実なものとしてとらえていた。中国とイギリスの交渉がもし決裂したならば、茶²⁾を入手するのが困難になると心配しており⁽⁴⁾、中国滞在中、乾隆帝へ書面をしたため、イギリス船長の配下の事務長が停泊中の港の付近で茶を調達することの許可をもとめている⁽⁵⁾。しかしながら、それは杞憂であった。彼らの中国滞在中、中国皇帝から彼らに、豊富で高品質の食料が無償供与され、そこには茶十箱も含まれていた⁽⁶⁾。彼がもっとも感激したのは、中国人が牛乳を飲む習慣がないのにもかかわらず、イギリス人が茶を飲むときに牛乳が不可欠だろうとおもんばかって、牝牛二頭を使節団に与えたことである⁽⁷⁾。

19世紀に台湾を旅行したフランス系アメリカ人のル・ジャンドル(Charles Guillaume Le Gendre 1830-99)³⁾は、当時の茶の流通経路について記録を残しており⁽⁸⁾、中国産の

1 ラジオ喫茶室の意味である。

2 もはや当時のイギリス人の生活上、不可欠のものとなっていた

3 フランス系アメリカ軍人のル・ジャンドルは、1872年に来日する以前、厦門駐在アメリ

紅茶が福建や香港を経由して、イギリスやアフリカにまで輸出されていたことがそこからはうかがわれる。グローバリゼーションということばを、「マクドナルド化」と同じような文脈でもちいることができるならば、19世紀にすでに中国産の紅茶のグローバリゼーションが興っていたことになるだろうか。

世界中に広まりつつあった茶であるが、改めて言うまでもなく、同じ茶でも地域によって飲用方法が異なる。前述したように、イギリス使節のマッカートニーは、中国人は茶を飲むとき牛乳をまぜないと述べている。約100年後の19世紀末に、オーストリア皇帝の命を受けて東洋を訪問した、グスタフ・クライトナー(KREITNER, Gustav 1847-93)も同様の観察をしており、中国の茶を「苦い茶」と表現している⁽⁹⁾。さらに中国から日本に茶が伝来したことを述べ、中国緑茶と日本の緑茶の製法の差異について詳述しながら、「緑茶は日本や中国では国中どこでも砂糖抜きで飲んでいる」と指摘している[グスタフ・クライトナー 1881: 20]。彼は、チベットにおける茶の習俗にも触れている⁽¹⁰⁾。

「清飲法⁴」が、日本や茶の原産国中国では、最も一般的な飲茶法であった。それにもかかわらず、茶に何も入れないで飲むのは、ヨーロッパ人にとって受け入れがたかったようである。ハインリッヒ・シュリーマン(Heinrich Schliemann 1822-90)『シュリーマン旅行記』で、中国では茶に砂糖も牛乳も入れずに飲んでいると記している⁽¹¹⁾。さらに彼は、北京の劇場では各種の食べ物や酒と茶と一緒に提供されており、観客は食べたり飲んだり、あるいは煙草を吸ったりしながら芝居を見ていること、客の中に女性はまったくいないことなどを指摘している⁽¹²⁾。中国の劇場は、後述するように、一種の茶館を兼ねているところも多かった。同時代の茶館が「男性客しかいない」とされていたことを思えば、興味深い指摘である⁵。

20世紀に至り、チベットを旅行したフランスの女性東洋学者、アレグザンドラ・ダヴィッド=ネール(Alexandra David-Neel 1866-1969)は、チベット人が客に対してはかならずバター茶をふるまうこと、バター茶は茶としてよりはむしろスープとして飲まれており、つかれきってごえている旅行者にはなよりの馳走であったこと、そしてチベット人の食事には茶が欠かせないことなどを述べている⁽¹³⁾。

さらに時代がくだり、中国の文化大革命終息後の1980年代に、汽車で中国横断旅行を行ったフランス系アメリカ人のポール・セロー(Paul Theroux 1941-)は、中国の汽車ではかならず無料で茶の葉と熱い湯が支給されること、中国人がよくジャムの空き瓶などに茶の葉を入れ、それに茶をそそいで飲んでいることを指摘している⁽¹⁴⁾。

カ領事であった。歌舞伎役者十五代目市村左衛門(1874-1945)の実父であるとの風評があった。

⁴茶を飲用するときに砂糖も牛乳も入れない飲みかたをさす。

⁵ 開放以前の中国では、身分の高い女性は纏足をしており、自由に外出することは困難であった。そのこともあって自分の邸に芸人をよび、芝居・歌・踊りを鑑賞したとされる。

このように、16世紀から20世紀にかけて中国を旅行した欧米人たちは、中国の茶の習俗について、チベットのバター茶をのぞいては清飲法であることに、一様に驚きをかくそうとはしない。

中国から欧米や日本に伝来し、各国の文化のなかでそれぞれ独自の発達をとげた茶は、今日、サハラの子午線や南米フェゴ島民に至るまで、地球規模で飲まれるようになっていくが、その習俗は文化圏によって異なる。茶は原産地中国の文化・歴史を象徴するものでもあるが、茶を別の民族が飲用するときおのずからその方法は異なる。日本・韓国のように清飲法の場合もあれば、ミルクや砂糖をいれてのむ人々も存在する。誤解を恐れずに述べるならば、同じ「茶」の飲用法や茶を取り囲む社会的状況の差異をみることによって、茶そのものはもとより茶が象徴する中国文化との距離も日常生活のレベルからうかびあがってくるのではないだろうか。わが国でも、1970年代末期以降、リーフティー・缶入り・ペットボトルなどの中国茶が普及した。現在、日本人が中国茶というとまず思い浮かべるのは、ペットボトル入りのウーロン茶である。そしてそれは、麦茶を凌駕して日本の茶文化に決定的に重要な位置を占めるようになる。その結果日本人は、ウーロン茶を通じて中国を表象化することになったのである。中国に親しみを持つようになったともいえよう。中国茶文化の日本への本格的かつ浮層的な普及は、じつにここから始まったといっても過言ではない。

周知のように、「茶」は世界各地でtea, the, tehaiなどと表記される。中国において「茶文化」なる語が使われ、人口に膾炙するようになったのは、20世紀末だという[阮 2003b: 私信]。茶文化は茶芸・茶の礼法・詩や絵画などの芸術をふくんだ新時代の言葉であり、単純な物質文化でもなければ精神文化でもない。むしろ両者が複合したもので、各時代の歴史的条件下でさまざまな形をとりながら発展した。そして現在では、一部の指導者達の独占物から広く市民一般に開放されているという[王玲 1992: 1-15]。現代中国の一般的な認識として、茶文化は茶に関する様々な形態・制度・機関をさすものともされるし[浙江大学茶学系 2002: 1]、茶文化のごく狭義としては、茶芸だけを指すときもある。茶芸という概念が「創造」されたのか「復興」したのか、茶芸概念誕生の経緯は本論で後述するが、中国の研究者によれば、茶を淹れる技法を指し[阮 2002: 前言]、1970年代末期の改革開放の時代以降に普及した概念であるものとされる。

さらに、中国茶文化を体感できる場として、茶館が存在する。茶館とは茶肆・茶楼・茶坊・茶店・茶居などさまざまな別名をもつ、客に茶や点心を提供する娯楽・休息・知人との交流などの機能をおびた、中国茶文化の重要な機構であり、文化の伝播がおこなわれる場所であると定義されている[呉旭霞 1999: 1]。簡単にいえば、中国茶の喫茶店とも表現できる、商業性を帯びた施設であるといえよう。

以下、本論文において中国浙江省杭州市を事例として、茶館の存在意義を考察し、それが茶葉貿易や中国茶文化に与えた影響について述べ、さらに茶文化のグローバリゼーショ

ンとの関係を検討したい。

0-2 本論の構成

本論は、以下のように構成されている。

序論以降の第1章では、中国における茶の定義と六大分類を、筆写の調査地であり、本論で事例として取り上げる中国浙江省杭州市の名産、西湖竜井茶(中国緑茶)を中心に記述した。

すなわち第2章では、杭州市の歴史を概観し、同市が「発展的な生活水準の高い文化的な都市」「南宋の古都としての歴史ある都市」と認識されていることの意味についてふれた。

第3章では、杭州市の茶文化が最も栄えた宋代の時代背景に触れたあと、宋代の茶文化の現象面を茶館と闘茶にしぼって検討し、さらに茶文化の他地方への普及の実態について、飲茶の情景を描いた墓室壁画から考察した。

第4章では、現代中国における茶館と茶芸館の差異を、中国の首都北京の例から論じた。

第5章では、中国茶葉貿易の変遷を、中国全土と浙江省の2つに分けてみておいた。

第6章は、杭州市内の茶に関する諸機関について触れた後、茶館の経営者・従業員のための資格である茶芸師・評茶師(ティスティング師)の培訓班(講習会)についてふれたのち、杭州市の有名茶芸師たちの茶芸観を記述し、最後に茶館と観光の関連性について考察した。

終章では、唐代から現代まで茶館を中心として継承されてきた茶文化が、宋代に杭州を中心として栄え、その伝統をくむ中国茶館の経営者・従業員に対する評茶師・茶芸師などの国家的評定によって、ますます中国茶館と観光・茶葉貿易の拡大をうみ、中国とりわけ杭州の茶葉貿易増大を招いたことについて記述し、受け皿となった日本の茶文化隆盛への社会的表象について考察し、茶文化のグローバリゼーションとの関係についてのべる。

結論では杭州市に多く存在する茶館の発達と、中国茶文化のグローバリゼーションとの関係についての研究成果を述べる。

第1章 中国における茶の起源と分類

1-1 中国における茶の起源

今日、世界中至るところで緑茶や紅茶、ウーロン茶など、さまざまな茶が飲用されている。すべての茶は植物学的にみれば同一種のカメリア・シネンシス(*Camellia sinensis*)であり、加工の仕方によって上記のように分類される。『茶経』⁽¹⁾の冒頭でも記されているように、茶の原産地は中国の南部雲南省あるいは四川省とされる。茶樹王とよばれる樹齢 600 年から 800 年に及ぶと推定される大木が、中国雲南省の^{シーサンパンナー}西双版纳⁶で 1858 年に発見されたが、その大木こそが茶の野生の原生樹とされる「^{なんださん}南糯山千年茶樹王」である。茶樹王は高さ 5.48m で、太さは大人二人が手をまわしてもとどかないほどであったが(図 1)、現在では枯れてしまっているという[横井 2004: 私信]。

茶ははじめから加工して飲用したものとはかぎらない。例えばタイ北部チェンマイの食用茶「ミエン」のように、人類が最初に口にした茶は、じつは食べるお茶であったと推測される[守屋 1992: 35]。しかしながら、人類が生喝茶葉を直接口にするのは、味もよいとはいいがたく、何よりも長期保存・流通に適さなかったが、7 世紀はじめには茶は本格的に加工・飲用されるようになっていった。

中国における茶飲用の歴史は、伝説の薬神神農からはじめる。神農は紀元前約 2780 年ごろの人物とされ、一日中山野をあるいて、ひとつひとつの薬草の効能を自分自身の身体で確かめたが、毎晩かならず一杯の茶を飲み、薬草の毒を消してから眠ったという。この故事から、茶は百薬の王とされるようになった[松下 1986: 3]。

では、茶が飲まれはじめた時期はいつか、文献に最初に「茶」の字が使用されたのは前漢時代の紀元前 59 年のことで、四川省成都における奴隷の契約文に、勤務の条件として茶を遠隔地まで購入する仕事を求める一節があるという[布目 1995: 67-69]。

茶の本格的な発展は、ひとりの人物の登場を待たなければならない。のちに茶神といわれる陸羽(733-804)その人である。唐代玄宗(685-762)の開元年間(713-41)、捨て子として生まれた彼は、現在の湖北省にある^{りょうがいじ}竜蓋寺^{ちしやく}の智積禪師(生没年不詳)によって育てられ、後に李齊物(生没年不詳)などの高官から才能をみとめられ、勉学の機会を得る。755 年に勃発した安史の乱後は、高官顔真卿(709-86)の幕下に入り、761 年にはすでに『茶経』を執筆していたとされる。『茶経』のなかで、陸羽は茶の起源や製茶の道具、製造、茶器、茶の煮立て方、飲み方、歴史、産地など、茶に関するすべての主題をさながら百科全書のように方面から記述している。『茶経』が茶の不朽の聖典といわれる由縁である[布目 1976: 11-15]。こうして体系的かつ総合的に『茶経』を撰筆することによって、陸羽は中国茶文化の基本を完成させたが、記述の中で陸羽は喫茶の風習が当時すでに広く普及して

⁶ ラオス国境近く、標高 1100m の地点である。

いたと指摘している[布目 1987: 97]。ちなみに唐代の茶は固形茶であり、それを粉末化して釜に沸かした湯に投じて飲み、茶を煮る作業は地面で行ったという[高橋 2001: 95-107]。

茶は、中国から全世界中に伝播していったが、経路は中国の広東経由と福建経由の2つに大別され、各地の茶の名称によって由来を推測できる^②。

では中国から日本に伝来したのはいつか。『日本後紀』^③に、空海（774-835）や最澄（767-822）と同行して中国から帰国した僧侶永忠（743-816）が、815年に嵯峨天皇（786-842）に自ら煎じた茶を献上したとあるのが、最初の記録とされる。一方、ヨーロッパへは1610年オランダの東インド会社によって伝来したとされており、1700年ごろには、北ヨーロッパでさえ茶は飲用されていた[角山 1980: 8-31]。

1-2 中国茶の六大分類

植物学的にすべて同一種である茶は、加工の仕方によって発酵度が異なる各種の茶に分けることができる。これを中国では六大分類といい、緑茶・黄茶・黒茶・青茶・白茶・紅茶に分けられる⁽¹⁾。

日本で一般に中国茶として普及しているのは、黒茶や青茶などだが、中国で茶の消費量の80%以上を占めているのは緑茶である[山西 1992: 26]。中国全土の茶の分布図からすれば、緑茶が最も多く飲用されているのは上海を中心とした江南地方であり[陳新華 1994: 42-43]、浙江省杭州市もそこにふくまれる(図2)。

緑茶の製法は、殺青→揉捻(茶の葉をもむ)→乾燥といった過程を経るが、中国茶の緑茶は日本のそれと加工法がちがうため、風味が異なる。日本の緑茶は、殺青の段階で蒸して茶の葉の発酵を止める蒸青をおこなうのに対し、中国の緑茶は炒って茶の葉の発酵をおさえる炒青である。そして、炒青と揉捻はすべて同じ釜で続けて行い、茶の品質と風味を維持する[浙江大学茶学系 2002: 31]。茶の葉を乾燥させる過程では、竹製の網に広げて、乾燥させていた(図3)。

西湖竜井茶は、色・香・味・形のすべてにすぐれているのが特徴で、これを「四絶」と表現する[陸松侯 2000: 84]。日本緑茶の場合、急須に茶葉を入れるため、それをあじわうポイントは、味と香とされる。それに対し、中国の緑茶はガラスのコップや茶杯の中に茶の葉を直接入れて、そこに湯をそそいで飲むため、味・香の他に茶の形の美しさも重要視される。西湖竜井茶は、獅子・竜・雲・虎の4つの品質区分があり、色はあざやかな緑で、すべて葉の形は扁平で剣のようにとがり、もっとも美しいと称される(図4)。

第2章 調査地概況 —— 杭州市の歴史と現況

考古学の調査によると、約 10・5 万年前に浙江省内ですでに石器時代人が活動をしていたという。1974 年冬、中国科学院と浙江省博物館の先史考古学の専門家が、浙江省の建徳県から人骨を発見し、これを建徳人となづけた[林 1996: 13]。つづいて 1973 年には、約紀元前 5000 年の河姆渡文化に属する鹿や馬を描いた陶器など(余姚市) [浙江文物考古所 1986: 3-4]、さらに 1961 年には約紀元前 4000 年の馬家浜文化に属する住居の跡と[林 1996: 15]、20 世紀後半に浙江省内からあいついで遺跡が発見された。さらに、1936 年には、杭州市近郊の良渚から約紀元前 3000 年の黒陶器・玉器などの遺物が続々と出土した。これを地名をとって良渚文化とよぶ[倪 2000: 1-4]。

春秋時代、杭州は呉越の争いの地であり、秦代になって、初めて杭州に銭塘県が設置された。前漢・後漢時代、銭塘江は次第に南に移り、西湖と分離をするようになった。当時の地方官僚が海水を防ぐ大防波堤をつくったが、これは杭州市が西湖に囲まれた街として発展するのに、多大な影響を及ぼした。三国時代、杭州は孫権 (182-252) の呉に属した[『歴史文化名城杭州』編委会 2000: 1-5]。

随王朝時代の 589 年、初めて杭州は銭塘郡と命名された[『杭州市地図集』編集部 2004: 1]。随王朝の煬帝 (569-618) は、中国の南北を結ぶ大運河を開いたが、杭州はその大運河の南の起点であったため、交通が発達し、経済・文化が大きく発展した。後代、杭州が中国南部の代表的文化都市として発展していく基盤はまさにここにつくられた。

唐代に入ると、杭州は日本や高麗との貿易の窓口となった。822 年、白居易 (772-846) が杭州刺史の時代に西湖を囲む白堤をつくり、杭州の発展に大きく寄与した。

五代の時代は、杭州の歴史上とりわけ重要な時期であった。923 年、鎮海軍節度使銭鏐 (852-943) は呉越を建国し、杭州を唐代の規模より大幅に拡大し、都としたのである。五代の杭州の市城は、現在の杭州の旧市街地とほぼ同じであり、同王朝において、六和塔や灵陰寺の石塔、雷峰塔、保淑塔などの杭州の多くの仏教建築がつくられ、六和塔から良山門までの堤が修築された[『歴史文化名城杭州』編委会 2000: 1-38]。

宋代は、杭州の歴史上頂点といえる時代であり、1089 年北宋の著名な文学者蘇東坡 (1036-1101) は杭州の地方官在任中に、20 万余人を動員して、西湖の上に長い堤をつくり、これを蘇堤と名づけた。以後、西湖の風景はさらに美しくなった。加えて井戸も六基開削し、杭州の住民に大きな利益をもたらした[闕 2000: 13-15]。

南宋に至り、1138 年に南宋の都と定められてからは、杭州は南宋時代 100 年余りの政治・経済・文化の中心となった。杭州には李唐 (北宋末期-南宋初期)、劉松年 (生没年不詳) などの美術や文学界の人材が集まり、杭州の文化史にいつそうの輝きをもたらした。現在でも杭州のとくに旧市街を中心とした場所で、南宋の遺産が各所にみられる。杭州市は中国美術学院が置かれるなど画家や書家が多く居住しているが、そのゆらいは南宋にあ

る。同時代に馬遠(生没年不詳)・馬麟(生没年不詳)・陳清海といった画家が、自分達の審美眼で西湖の美しい景色を 10 点選抜し、それぞれに雅名をつけた。これが現在にまで伝わる「西湖十景」(蘇堤春曉・柳浪聞鶯・花港觀魚・双峰挿雲・南屏晚鐘・断桥残雪・三潭印月・曲院風荷・平湖秋月・雷峰夕照)である。これらのスポットはそれぞれが観光名所になっており、現在も杭州市の有名な茶館は多くその周辺にある。(図 22・図 23)

前述したように、杭州市は南宋時代の古都である。そしてこの古都のイメージは、杭州市民と杭州市をおとずれる人々の脳裏から、かたときも離れることはない。京都や鎌倉をおとずれる人々を想起していただければよい。

杭州市内の数ある観光拠点の中で、ひときわ人々の耳目を集めるスポットがある。西湖の北辺にある岳廟である。岳廟は、南宋初めの武将岳飛(1103-41)の墓所である。彼は農民出身の将軍であり、金軍が占領した中国の北半分の奪回をこころみたものの、和議派の宰相秦檜(1090-1155)の謀略によって獄死した。中国の人々にとって、岳飛は民族的な英雄として、熱心に崇拝されている。岳廟の中には、ひざを折って座る、上半身裸の秦檜夫妻の銅像が置かれているが⁷、いまなお英雄を私利私欲のために殺害した売国奴とされ、怒りと軽蔑をこめてその銅像につばを吐きかける人が後をたたない。

同市内には、ほかにも 14 箇所の全国重点文物保護機関と 2 つの国家クラスの博物館をそなえているが、南宋銭幣博物館や中国絲綢博物館など、南宋に関する観光施設も多々存在する。そのなかでもとくに注目を集めるのが、市の南部に広がる「宋城⁸」なるテーマパークであろうか。面積の大部分を、清明上河図(北宋末期の日常生活を克明に描いた絵巻)を再現した街が占め、宋代史を体感できる施設となっている。「1 日いただけたら、あなたを 1000 年前にタイムスリップさせます」。これが、そこのスローガンである。

また南宋時代の官窯の遺跡に、建築面積 4000 平方 m にも及ぶ杭州南宋官窯博物館がたてられている。南宋時代、杭州市では茶文化に欠かせない陶磁器の生産も盛んであり、とくに皇帝専用の陶磁器の釜である官窯からは、文化史に残る逸品がうみだされたといわれる。

元代に杭州は首都ではなくなったが、やはり依然として昔日の繁栄を保っていた。13 世紀にマルコ・ポーロが杭州を訪れたとき、世界中でもっとも華麗な都市として、「天上に楽園あり、地上に杭州あり」と称賛したことからも、当時の盛況ぶりがうかがわれる。ポーロは他にも、杭州の街の中には湖以外に至るところに運河が通っており、それが海と通じて汚い空気が海に運ばれてしまうために、市内の空気は清潔であること、運河や幅広い道路を使って物資の流通が非常に盛んであること、街の周りには歴代の施政者たちが建造した堤が張り巡らされており、これらが治水の役目もはたすと同時に街の防波堤ともなっていること、食料品が非常に豊富である、なかでも野菜と果物が大変に豊富であることなど

⁷ 刑罰を受けている姿である。

⁸ 「城」とは、中国語で街の意味である。

現代の杭州にも通じる特徴をあげている[ポーロ 1298: 94-98]。

明王朝・清王朝時代も、杭州の経済と文化は発展を続けた。悠久の歴史と文化、豊富な文物遺跡、美しい湖の景色などによって、中国のみならず国外にまで歴史的な文化都市・観光都市として名をひびかせた。漢民族の明朝がほろび、満州族の清王朝に時代がうつると、杭州は満州族の清王朝政府へのレジスタンス運動の拠点となった。杭州を満州族が占領できたのは、清王朝成立してから 30 年もたった 1645 年のことであった。辮髮令⁹に、抵抗して命をおとす者が毎日 100 人にもものぼり、死体で橋がうまるほどの悲惨さであったという[『歴史文化名城杭州』編委会 2000: 106-109]。乾隆帝(1711-99) が杭州市を頻りに訪問したのは、中国南部を慰撫して同地の文化活動をますます盛んにするという目的もあったとされる[『歴史文化名城杭州』編委会 2000: 106-109]。

竜井茶^①を愛した政治家は、杭州を 6 回訪問してみずから茶の樹を植樹した乾隆帝だけにとどまらない[阮 1990: 50-53]。中華人民共和国の毛沢東(1893-1976) も、杭州をしばしば訪れ、竜井茶を賞味するのみではなく、茶関係の諸機関の専門家・竜井村を訪問して、竜井茶の製造を奨励した。

西湖竜井茶の由来については諸説あるが、竜井泉・竜井寺なども存在している。湖のそばに寺が建立されて茶の苗木を植えられ、そこから西湖竜井茶と名づけられたのではないかと。杭州市全体はなだらかな山に囲まれた盆地のようになり、西湖の空気が周辺の低い山々をうるおし、その穏やかな気候とあいまって茶の栽培には最適の土地となっている。

20 世紀の後半、まだ杭州の街が旧市街地の面影を色濃く残していたころには、市内のあちこちに水路・沼・池などが数多くみられ、乾燥した中国の中でも非常に暮らしやすいところであった。そのため現在でも保養地・観光地として大いに親しまれている。杭州市には中国共産党の幹部政治家の別荘も多く建っていたが、現在はそのほとんどがホテルとなっている。ちなみに、中国の国会にあたる中国人民大会で供される茶は、西湖竜井茶が大半を占めている。これは、杭州市を産地とする西湖竜井茶が、中国茶を代表するものとみなされての証左といえるだろう。

現在同市は、中国南部の江南の中心都市である。中国第一の経済都市上海から 140km、バスないし汽車で 2 時間ほど南下したところに位置し(図 5)、2004 年 3 月から、成田-杭州間に日本の航空会社の直行便が毎日就航している。2003 年の時点では、同市の面積は 1 万 6596 k m²、人口は 643 万である[杭州市統計局 2004: 20]。市全体の総人口は 643 万(2003 年度)で、うち非農業人口は 263 万であり、男性 329 万、女性は 314 万、総人口の中で市部の人口は 393 万(内訳は 201 万、女性は 182 万、非農業人口は 216 万)、出生率は、2003 年度で 8%、死亡率は 6%である[杭州市統計局 2004: 20]。

⁹ 満州族の王朝である清王朝が、漢民族に服従の証として求めた満州式の男性の髪型をさす。頭髪の一部をそり、後ろに三編みにしてたらず。

さらに杭州市の気候は、平均気温 17.5℃、降水量 949mmである。地元の茶関係者は口をそろえて、「杭州市は姉妹都市である静岡市(平均気温は 16.5℃)に気候は似ており、中国の他の都市に比べて格段に湿潤である」という。杭州市と静岡市は、研究者・学生の交換留学や催事の共同開催など、交流もまた密である。茶の生育に適した自然条件は、霧が発生しやすく直射日光があたらないこと¹⁰、気温 20-30度であること、年間平均降水量 1000 mm前後であること¹¹などであるが [王鎮恒 2000: 16-17]、杭州市はこれらの条件をほぼ満たしている。浙北平原のなかに広がる同市は、東に銭塘江をひかえており、秋分の前夜の潮の逆流、毎月の小さな潮の逆流は有名である。西湖の湖面の海拔は現在 20m前後であり、市の西側には一面に竜井村の茶畑が広がっている。

市全体の地勢は、西南から東北にかけて傾斜している。西北部と西部は浙西中山丘陵區に属し、そこには天目山・白際山など比較的低い山並がつづいている。山地と丘陵地帯で市の面積の 65.6%を占め、平原はわずか 26.4%にすぎない。河川は全面積の 8%におよんでいるうえで[『杭州市地図帳』編集部 2004: 3]、沼・池も多く、いまなおマルコ・ポーロの描写した水郷都市の面影を色濃く残している。

浙江省の経済水準は、北京、上海、広東、天津各特別区について、中国の 40 あまりの省の中で、第 5 位に位置する(表 1)。物価水準は中国の中でも高いほうであり、2003 年現在杭州市の中心部の高級マンションは、40 万元¹²で売買されていた。生活水準としては中国の各都市の住民の給与の平均金額は、上位から深圳の 4 万 9038 元、上海の 4 万 8157 元、北京の 4 万 5903 元とつづくが、杭州も第 8 位の 3 万 3380 元である[上海市茶葉学会 2003: 48]。タクシーの初乗り運賃(3kmまで)は、2003 年時点で浙江省内の他の都市、例えば寧波市などが 7 元なのに対し、杭州市は上海市と同様に 10 元であった。市の名産品は、第一に茶や絹製品、干したけのこ・はさみなどの軽工業品が中心である¹³。

¹⁰茶葉の葉緑素Bの含有率が、たかくなる。

¹¹土壌の水分含有率が 70-90%になる。

¹²2003 年時点では 1 元=約 15 円であり、40 万元は日本円の 600 万円に相当する。杭州市の物価は、2003 年時点では米が 500gで 1.3 元、バケツが 2 元、トマトが 10 個で 5 元、みかんが 500 g で 2 元、贈答用の果物籠が 50 元、バースデーケーキが 40 元と、他の都市に較べて比較的高値であった。教育費は浙江大学の留学生の月謝が半年で 8000 元、浙江工業大学の中国人学生の月謝が 1 年で 6000 元であった。

¹³杭州市はまた、上海を中心とした江南料理の有名な土地であり、西湖周辺には有名な料理店がならんでいるが、すべて杭州菜を提供する店舗ばかりであり、中国の他の地方の料理や外国料理はあまり存在しなかった。

食生活の面では、杭州市は少なくとも 2003 年の時点においては、中国の他の都市と同様に西洋料理や日本料理など外来食の影響はあまりみられなかった。市内には、西湖周辺の観光地に外資系のレストランや喫茶店(たとえばスターバックス・ハーゲンダッツ)などがみられたが、コーヒー一杯の値段が豪華な食事の値段と同様に 20 元と高値なために、普及していたとはいえなかった。コンビニエンスストアなどが台湾系を中心に上海から進

2003年、杭州市のGDPは2099億7700元に達し、成長率は15.2%である。なんと13年連続して、2桁の成長率を維持しているありさまであり、経済的に急成長をとげているといってもいいだろう。第1次・第2次・第3次産業の構成比率は、それぞれ6.0%、51.9%、42.1%である。人口一人当たりの生産量は3万2819元である。2003年、杭州市全体の財政収入は329億7100元に達し、成長率は28.2%に達する[杭州市統計局 2004: 1]。

上記の数字を見てもわかるように、1979年の改革開放以来の中国政府の経済政策の指導のもと、杭州市の経済は順調に発展しており、市の総合的実力は常に増大し続け、市民生活は日々新しい変化に直面している。近年、杭州市は「大都市を構築し、新しい地上の天国を建設する」ことを戦略目的に置き、他の大都市と比べ、治安もよい。「生活するのは杭州」「観光は杭州」「勉強するのは杭州」「企業を興すのは杭州」を都市のスローガンにかかげ、優秀な人材が豊富であること、美しい自然環境、商業の発展、消費者の購買力が強いこと、交通の便のよいことなどを利用して、ますます生活・観光・起業に快適な都市となっている。特に観光においては、杭州市は2箇所の風景名勝地区と5箇所の森林公園、2箇所の自然保護区、1箇所の観光レジャー区などを擁しており、すべて中国政府が認定している。そして、それらのひとつが、中国茶葉博物館である。

出し、日本料理のおでんなどを中心に売られていたものの、これもまた20元前後と高値なために普及していない。市内には外国料理店として西洋料理店が3軒・日本料理店が5軒・韓国料理店が3軒存在していたが、やはり客単価が高いことなどから盛大に繁盛しているとはいえなかった。

第3章 宋代の杭州における茶文化

3-1 宋代の茶をめぐる背景

「開門七件事」という言葉がある。南宋時代の人呉自牧（生没年不詳）が、首都臨安（現杭州）¹⁴の生活を描写した『夢梁録』に初出する言葉で[呉自牧 1147: 150]、日常生活の必需品をさす¹⁵。朝おきて門を開けるとすぐに必要なものにかぞえられるほど、茶は宋代の中国人の生活にとってたいへん身近なものであったことがうかがえる。本章では、そうした宋代の茶の生産・加工過程や流通状況を絵画資料¹⁶や統計資料を含む文献資料から検証したい。

茶の生産量が飛躍的に増大し[陳椽 1984: 52-67]、茶の加工法もまた急速に進歩して、茶が長期間の保存に耐えるようになったこと、また北宋の時代、中国の文化・芸術全般が発展したこととあいまって、茶は一般の人々にも普及し、茶文化が花開いた。例えば茶館が繁栄し、皇帝徽宗趙佶（1082-1135）の茶書『大觀茶論』をはじめとする優れた茶書も多く著され、茶を題材とした絵画も数多く登場するようになった[董 2002: 65-71]。

宋は、首都を汴京、現在の開封においた北宋(960-1127)と、臨安においた南宋(1127-1279)に分かれる。1191年、南宋の中国から栄西（1141-1215）が茶樹を日本にもちかえり、これによって、日本での茶の栽培が開始されたとされる[布目 1998: 62]。もとよりそれは、栄西が自らの臨濟禅に茶を用いようとした意図を示すものだが、そうした彼の着想を生み出したのが、当時南宋で流行していた中国の茶文化だったのだろうと思われる。

周知のように、暖かい土地を好み、温度や土壌、日射量などに大きく影響される茶の故郷は、雲南や四川など中国の南部である。北宋時代、茶が主に生産されたのは、長江流域と淮南一帯であり、江南路・淮南路・荊湖路・両浙路・福建路など中国南部がその中心であった。

前章でみておいたように、茶は宋代に中国全土で広く飲まれるようになり、茶文化が発展した。そして宋代の茶文化発展の要因について述べることは、南宋の古都であった杭州の現代の事例を語る上で、たいへん重要であると思われる。

① 軍事的・経済的状況

¹⁴ 以下では北宋の首都汴京、南宋の首都臨安を、それぞれ現在の地名である開封、杭州とよぶ。

¹⁵ 人が朝おきて門を開けるとただちに必要となる七つの品目、すなわち「柴・米・油・塩・醬・酢・茶」をさす[阮 2002: 前言]。

¹⁶ 本節では北宋をおもに考察するが残念なことに筆者は、今回、北宋の茶書の中に茶の製造過程についての絵画資料を見出すことができなかった。それゆえ、茶の製造を示す絵画資料として南宋の『茶具図贊』を用いた。

宋王朝は基本的に文治国家であったため、周辺の異民族より軍事力が劣っていた。こうした現実に対処するには、さまざまな経済的方策を講じざるを得なかった。代表的なものが、茶馬貿易と茶法による茶の専売制度である。

茶馬貿易とは、漢民族の茶と周辺の異民族の馬を交換する貿易であり、漢民族にとっては非常に経済的利益が大きいものであった。茶の効能が中国本草学においてどのように位置づけられていたかは、宋代の書を飲用した日本の『喫茶養生記』の記述から知ることが出来るが^①、遼の人々も、身体のために茶を飲んだと記録にある^②。こうした状況から、中国だけに産出する茶を入手するため、周辺の異民族は茶馬貿易に応じざるをえなかった[布目 1976: 26]。

また、中国は周辺民族との攻防がはげしく、すべての王朝はつねに国境に対する警戒を怠らなかった。10世紀後半の建国以来、軍事的に弱体化していた宋はことさらにそうで、国境付近に軍隊がつねに駐屯していた。切実な問題のひとつは、糧食の確保であった。宋王朝においては、国境に塩・茶などを物資を搬送した業者に、塩引や茶引などを渡した。塩引・茶引は、茶や塩を売買すること許可する政府発行の証明書のことである。現代の感覚にすると、塩切符・茶切符であろうか。国家専売制度のもとに販売されるべき、塩や茶の販売権利を特定の商人に認めるものであり、本来の制度維持の見地からは一種の例外措置といえる[佐伯 1977:26]。

商人は、国境線に軍需品を納入して、はじめて塩引・茶引を手に入れることができた。塩引・茶引による塩・茶の売買は、非常に高い割増料を加えることが可能であったため、政府からこれらをもらうために商人は進んで軍需品を納入し、塩・茶の販売によって利益をあげたのである。一種の軍需景気といえるかもしれないが、これにより多くの商人が財を築いたという[佐伯 1977: 26]。また塩引・茶引を用いる納入促進策は、中国の他の時代にもしばしば実施され、明代にもほぼ同様の制度である開中法が実施された[宍戸 1996: 7]。塩引や茶引は、ことほどさように茶は宋の経済の一端を語る上で避けて通れない問題であったといえよう。

② 人口問題

周知のように、茶は労働集約型の農産品であるが、ここに中国宋代を通じて茶の生産量の推移から、宋代の人口増減を一瞥しておこう。

北宋中期の政治家欧陽脩(1007-72)が1060年に刊行した、すなわち『新唐書』食貨志によると、唐初期太宗(598-649)の627年から649年にかけて、中国の戸数は300万戸に満たなかったが、武則天(628-705)の治世末期にあたる705年には2倍の635万戸あまり、さらに玄宗皇帝の754年には961万戸と、唐初期の3倍以上も増えている[欧陽 1060: 2093-2095]。しかし、唐代後半になると、755年から763年にかけての安史の乱の後も、全国各地に軍閥化してほとんど自立政権をつくっていた節度使(元来は、地方の軍職名である)の反乱がつづき、戦乱によって国力は低下し、人口は約2/3になり、4000万前後にな

ってしまった[孫 2001: 15]。

中国北宋の時代の領域は、河北省・山西省・陝西省・甘肅省・山東省・河南省・江蘇省・安徽省・浙江省・河北省・四川省・福建省・江西省・湖南省・貴州省・広東省・広西省である。以下、宋代の人口の増減をみると、宋王朝建国直前の 927 年に、全戸数は 96 万 7353 戸に激減し、人口は約 485 万。これは、漢民族の王朝と北方の契丹族の遼王朝(916-1125)との戦争との影響であろう。余波を受けて、960 年の北宋建国直後の 966 年には 53 万 4039 戸、約 265 万、972 年 17 万 0263 戸、約 85 万にまで人口は減少した。

975 年、北宋は南唐を降伏させ、江南を併合した。その結果、976 年には 65 万 5065 となり、人口は約 330 万人増加した。しかし 979 年 北宋はまた遼王朝との戦争に敗れ、全戸数は 15 万 1978、人口約 75 万にまでおちこんだ。そして宋代初期には人口が約 400 万、戸数が 96 万戸となり[孫 2001: 15]、1101 年には、戸数は約 2088 万、人口は 4673 万と急増する[脱脱(生没年不詳) 1345: 2093-2095]。さらに徽宗皇帝の 1107 年から 1110 年頃にかけてそして総人口は、約一億人であったと指摘される[孫 2001: 15]。1101 年と比べて人口が 2 倍以上増加していることになる。以上述べた人口の急激な変動には、以下のような諸要因が考えられるとされる。ひとつにはそれまでの苛酷な徴税を逃れるために姿を隠し、またもどってきたこと[路 2000: 484]。もうひとつは、社会が比較的安定し、経済が発展したことなどである[路 2000: 472]。当時の官庁の人口統計は、主に税金の徴収を目的としていたため、人口数ではなく戸数を重視したり、奴隷や女性はいれずに成人男性の人口のみを数えたりしている可能性もある。戸籍に名前が記載されていた農民の中でも、実際に耕作をおこなう農民は 20-30%にとどまったため、国庫に入る租税は 50-60%もなかったといわれ^③、税の徴収を第一の目的としていた戸籍制度もどこまで実態を反映していたかは、疑問視されているようである。さらに北宋末期にも、浮浪者・行き倒れになってしまった人などが増加していることも、指摘されている[伊原 2003: 57]。人口データは公の記録しか残存していないので、その検証はおおいに必要とするところであるが、社会的要因に大規模な人口増減があったことは事実であろう。

③ 農業生産力の増加

茶葉は、主要な農業生産物のひとつであり、宋の茶葉の生産量を検討する際に、農業の発展状況に触れる必要がある。中国の農業においても、わが国と同じく中心的地位を占めていたのは、糧食、とりわけ米の生産である。糧食が不足する事態で、茶のような商品作物の生産が順調に発展するとは考えにくく、宋王朝は農業の奨励を非常に熱心に行った。具体的には農業推進のための役所の設置や農具の配給、農業用の牛の税金の免除、桑の栽培などである。とくに国家が重要視したのは、荒地の開墾と流民の帰業奨励政策であった。そのため、政府は農業用の牛や農具、種子と食糧などの資金を農民に貸したり、多くの土地を開墾したものには官位を与えたり、また流民のなかで農業に復帰する者にはもとの土地を返還したり、税や役をある程度免除したりしたため、墾田は著しく増加したといわれ

る[和田 1960: 11]。北宋全体の墾田の増加状況についていえば、北宋初期の墾田数は 976 年に 2 万 9500 畝¹⁷であったのに対し、約 100 年後の 1083 年には 4 万 4000 畝、976 年に比べると約 1.5 倍も増加したことになる[孫 2001: 6-8]。

④ 食文化全体の発展

政権が比較的安定し、専制主義の中央集権がさらに強化され、中国の伝統文化がますます成熟した 11 世紀北宋においては、飲食文化もまた長足の進歩を遂げ、新しい時代をつくり上げた。事実、都市の飲食市場は日まじに繁盛し、各地にさまざまな名物料理が生まれ、それら各民族各地区の飲食文化の交流も盛んになり、中国飲食文化史上まさに画期的な時代となった[姚偉鈞 1999: 147]。こうした飲食技術の発達を支えたのは、燃料であった。当時のかまどの考古学上の発見や、調理の様子を描いた絵画などによって、中国北方では北宋時代からそれまでの柴や草に代わって、調理に石炭が使われはじめた[徐 2000: 230]。宋代の飲食の技術が唐代を超えていたため、主食の飯・粥・麵・小麦粉製品が、多種多様になった。一例として蘇東坡が現在の湖北省黄岡市でつくった二紅飯(大豆と小豆でつくったご飯)がある[楊渭生 1998: 41-42]。たとえば現在なお代表的な中国料理の一つである東坡肉(骨皮つきの豚肉を醤油で煮込んだもの)などがある[王仁湘 1993: 448]。こうした食文化水準全体の向上に伴い、飲食文化の一部分である茶文化も飛躍的に発展したのではないかと、筆者はそう推測している。

⑤ 徽宗皇帝(在位 1100-25)の影響

徽宗皇帝趙佶は、北宋の代表的な芸術家といえる。徽宗は宰相蔡京(1047-1126)を重用し、北宋を滅亡に導いた皇帝として、為政者としての評価は低いが、芸術的才能は衆目の認めるところとなっていた。書や造園、さらに為政者として瑞祥を希求して描いた花鳥画など、徽宗の手になる傑作は多く[板倉 2004: 128-139]、とくに徽宗親筆の鷹の絵は日本でも珍重された。

何よりこの徽宗皇帝は 1107 年に茶書『大觀茶論』を著し、中国茶文化の発展にもまた大きな役割をはたした。『大觀茶論』は北宋の代表的な書物のひとつであり、全文わずか 2900 字たらずとはいえ、そこでは茶の育種法からはじまって、製茶法や茶の品評法、さらには淹れ方までが明確に紹介されている[趙佶 1107: 1-10 丁]。中国茶文化の発展は、じつに徽宗皇帝の芸術へのこだわりを負うところが大きいとされる所以である。

⑥ 茶の加工法の進歩

茶の品質についての基準が、日本と中国では異なっており、一般に日本人は茶を味と香りにポイントをおいて評価するが、中国人はそれに加えて、茶の色と形も重視する。例えば、西湖竜井茶は、色・香・味・形の「四絶」すべてにすぐれている故に、現在の中国緑茶の銘茶のひとつとされる[陸松侯 2000: 84]。中国の緑茶はガラスの透明なコップや、茶

¹⁷ 畝は中国の田畑の単位であり、1 畝=約 1/15haに相当する。さらに 1 頃=100 畝(1 畝=1/15ha)にあたる。両者とも現在でも使用されている。

杯の中に茶の葉を直接入れて湯を注いで飲むのが一般的である。中国茶の製造法の変遷を考える際に、茶の賞味法の力点が日本と中国では異なり、味・香り以外に形と色の美しさも鑑賞の対象となるという点に留意しなければならない。中国の喫茶史関係の資料には、茶の色彩に関する記述もまた多い。例えば、唐の固形茶は製法の上では緑茶に属するが、表面は発酵のため色は茶色または黒であった。宋の固形茶(北苑団茶)は、唐と同様の製法であるが、より製茶技術が発展し、茶の粒子はより細かく緻密であり、表面はまた発酵の程度により緑色、茶色、茶黒色、黒色などとなり、茶を淹れて飲む際は茶の粒子と湯が混じって薄い乳白色となっていたという¹⁴⁾。

唐代には、粗茶・散茶・末茶・餅茶の4種の茶が存在した。しかし宋代に至ると、茶は片茶¹⁸⁾と散茶の2種類に大きく分類されるようになる[脱脱 1345: 4477]。片茶は唐の餅茶の流れを引く固形茶で、散茶は茶葉の形状をのこした葉茶であり、末茶をも含んでいた。他に花びらを混合させた花茶も存在していた¹⁹⁾。宋の茶の中で中心的な位置を占めていた片茶は、茶葉を蒸し、茶臼に入れて搗き、さらに型に入れて円形、方形にかためたものである。中でも上質なものは蠟面茶とよばれた。蠟面茶の名の由来は、製造するとき香料や油を入れ、表面に油が浮かび、蠟をとかしたようになるためであるとされる[朱世英 2002: 25]。

宋の末茶は、現在の日本の抹茶と同じような茶摘みした葉茶を加熱してつくる製法であり、固形の茶を粉末にしてつくったものではなかった[布目 1995: 219-220]。宋代の王安石(1021-86)の新法²⁰⁾実施時には、水磨茶(粉末茶)が製造されていた。これは、片茶をはじめから粉末状にして販売した茶であるが、変質しやすいため長期保存が利かず、国家にとって利潤が少ないとしてやがて製造されなくなってしまった[古林 1987: 72-91]。

宋代に力を入れて生産されていたのは、やはり片茶であり、同時代の茶書の『茶録』や『宣和北苑貢茶録』なども、これを中心に記述している。製茶技術が発展するとともに片茶は国家の重要な財源のひとつとなった[布目 1976: 22-26]。

南宋の『茶具図贊』は、1269年に書かれた茶書である。著者の審案老人(生没年不詳)は、一説には進士の董眞卿ともされる。『茶具図贊』の内容は、茶を製造したり入れたりする際に用いる茶器12点を、それぞれ擬人化して姓名・字^{あざな}・号・官爵などをつけ、図に贊を加えたものである。だが、一種の戯文であり、体系的な茶書とはいえないとする見解も

¹⁸⁾ 別名団茶ともいう[古林 1987: 72]。

¹⁹⁾ 散茶は現在の茶に形状が類似し、花茶は現在のジャスミンティに近いとされる[布目 1995: 171]。

²⁰⁾ 北宋後期の政治家王安石が行った、国家経済再建のための諸政策をさすが、新法派と新法に反対する旧法派(司馬光、歐陽脩など)とによる国家を二分する政争を招き、北宋滅亡の一要因となった[佐伯 1990: 137-151]。

あるが[高橋 2000: 58]、宋の壁画や他の絵画と比較しても、当時の茶器²¹を理解するうえで極めて高い価値をもっているとされる。宋の茶文化を語るときに頻出する書であり、かつ茶の加工に用いる器具を具体的に説明している。

宋代の固形茶の製法を以下に説明する。茶の製造は太陽暦の3月5日または6日からはじまるが、天候が日照り続きであったり蒸し暑かったりすると、よい茶ができない[布目 1976: 200-201]

摘茶：茶の芽をつみ、蕊^{すい}を取り出し、水に浸して洗う。宋においては、唐よりもさらに材料の選別を重視した⁽⁵⁾。茶つみは夜明け前に行い、太陽がのぼれば止める。つめで芽を断ち切るようにし、指でひねりとらない。

蒸青：蒸す前に繰り返し洗浄し、きれいにした茶を十分に熱されているところに入れて蒸す[趙汝礪（生没年不詳）1186: 4 丁右]。茶の性質によって、蒸す加減を調節した。

搾茶：工程の主な目的は、茶の苦味や渋みを取り除くことである。蒸した茶を布などに包み、搾(機械)でしぼる。まず、小さい「小搾」をつかって表面上の水分をとり、その後「大搾」で本格的に搾る。最上の若い茶には「馬搾」をつかう[劉勤晋 2004: 4-5]。

研茶：ここで、唐の『茶経』の時代には杵臼を使ったが、宋では固形茶1個分ずつ丁寧にすっていくため、唐代に比べてより硬質な固形茶が出来上がった[布目 1998: 63]。

造茶：すり終わった茶は指で満遍なくならし揉んで滑らかにして、型に入れた。これは銀や銅などでつくられており、その表面の模様は、貢茶の場合は竜がほとんどであった。『宣和北苑貢茶録』記載の貢茶は名称だけで42種類もあるが、名称に竜の字があるものは7種類に及ぶ[熊蕃(生没年不詳): 3 丁左-4 丁左]。

焙茶：型に入れた茶を強火であぶり、沸騰した湯に3回くぐらせ、一晚火であぶった後、煙焙に6-15日入れる。日数は固形茶の厚さによって調整する[布目 1998: 63]。日数が満ちたら湯気をくぐらせ、発色させる。すると、最後には表面に光沢を生じたという[高橋 1989: 256]。

完成後の固形茶(片茶)は薬研で粉末にし、篩にかけてから淹れた。『大観茶論』によると、薬研は銀製を最上のものとし、次は鍛鉄製で、鋳物製は茶の色を悪くするとある。また茶を粉末にする過程で、薬研をつかわずに粉末にする方法もある。図6は従者が長方形の低いテーブルの上にまたがって座り、テーブルの上茶磨をおいて、今まさに茶を挽いているところである。茶磨とは、米に使う石臼と大差ないものであり、上臼と下臼によってできている。後述する『茶具図贊』の石転運も同様のものである[廖 1996: 57]。茶磨は、石転運には無い茶の掃きだし口がついている[布目 1998: 74-78]。粉末にした茶は、『大観茶論』によると、細かい目の篩で面がぴんと張ったものでふるうと、とろりとした茶ができるという[劉 2004: 4-5]。

²¹ 本論文で用いる「茶器」という用語は、茶の加工に用いる器も含む。

次に、『茶具図贊』から茶を保存・飲用する過程について述べたい。『茶具図贊』は、茶を製造し飲用するとき用いる 12 の道具を図版とともに示したものである。茶を製造するときの道具だけではなく、茶を飲用するときの道具もあり、それらが内容の過半数を占めている[審案老人 1269: 2 丁左]。当時、茶は製造→入れる→飲用するまでの過程を、一続きのものとしてとらえていたのではないかと思える。『茶具図贊』の記述では、型に入れて固めた茶を火であぶり、乾燥させ、より強く固めるための道具の説明を除くと、ほとんどが完成した固形茶を保存し、茶を淹れるための道具に焦点がしぼられている[審案老人 1269: 2-14 丁]。『茶具図贊』には、さらに製造された茶の保存に用いる道具の精密な図版も解説文とともに付されている。ここでは『茶具図贊』の道具から、茶を保存し飲用するプロセスについて明示したい。

茶を保存する：ここでは、図 7 の韋鴻臚を使用する。固形茶を保存する際には篩を用いる。使用に茶をあたっては蒲の若葉で密封し、湿気をさけるために高所に置いた。韋鴻臚なる呼称は鴻臚卿に由来し、そこには来客用との意味が込められている。韋は、擬人化による姓のひとつであるが、動詞の「囲む」としても使用される。素材が葦の可能性もある。

固くなった茶を打ち砕く：図 8 の木待制を使用する。木製の砧と金または鉄製の椎の図である。砧は固形茶を打ち砕くときの台、椎は槌であり、例えば古くなった固形茶を飲用する場合などに用いられた。宋の片茶は唐の餅茶に比べて固さがかたくなり、質も緻密になったため、唐の『茶経』にはないこれらが用いられた[布目 1995:236]。中に木の板がある[高橋 1996:127]。

打ち砕いた茶をより細かくする：図 9 の金法曹を使用する。金属製の茶をするための薬研である。これも唐の『茶経』においては木製であるが、宋代には固形茶がよりかたくなったため、薬研に金属を用いられるようになったのである。また、茶をより細かく粉末にするときに、図 10 の石転運を使用することもあった。『大観茶論』にこれについての記載はない。[布目 1995: 236]。瓷石と同じ類の石ともされる[高橋 1996: 127]。

すった茶を篩にかける：まず、胡員外(粉末の固形茶をすくうためのさじ)を用いて、粉末の茶をあつめる。集めた茶を、羅枢密(篩)にかけ、より細かくする。次に、ふるった茶を宗従事(鳥の羽)であつめる[高橋 1996: 128]。唐で用いられていなかった砧槌などが宋で使われだしたこと、薬研が唐では木製であったのが、宋代では金属性になったことから、宋の固形茶の品質が唐に比べて向上し、より硬質かつ緻密になったことがうかがわれる。宋の茶加工技術の進歩を端的に示すものである。

⑦ 加工法の進歩による、茶の品質向上

固さの面では、さきにも述べたように 1 個ずつ丁寧にすって製造したため、唐代の固形茶よりもさらに緻密につくられているが[布目 2001: 205]、宋代の固形茶では、固さのみならず、色や味も改善されたようである。

色については、宋代の固形茶の製法を宋代の茶書に忠実に再現し、色を観察した記録が

ある。それによると、何日もかけて乾燥した結果、固形茶の表面は黒く、点てると茶の色がうすくなる茶ができあがったという[高橋 1989: 254]。さらに、高橋は、宋代の人間は唐代の茶が緑色に対して、自分たちの茶が白であることを誇っていたとし、客観的にみて宋代の茶は白く、唐代より美しいと見られていたと推測している[高橋 1989: 257]。加工法の進歩により、宋代には色と同様に味についても、水準があがったと推測される。『大観茶論』によれば、茶は製造過程の蒸し方、搾り方によって、色と味が大きく左右されるという[趙 1107: 3 丁右]。同時代の別の茶書『北苑別録』も、製造過程の蒸し方の重要性のほかに、加工のはじめの過程で、茶の芽を選別することの重要性を説いている[趙 1186: 4 丁右]。宋代の製茶技術は特に搾り方が唐代よりも進歩したとされるが[姚國坤 1991: 24]、搾る過程を経て、宋代の茶は加工によって茶の本来の味や香りや味はかなり失われ、人工的に味がだされるようになっていたのである[布目 2001: 78]。

『宣和北苑貢茶録』『北苑別録』などといった宋代の当時の茶書にも、茶の製造法が旧来よりも精妙であり、すぐれた茶が次々と生産されたことが述べられている[熊 1182: 8 丁左]、[趙 1186: 1 丁右]。精選した茶の目を入念に製茶することにより、色や味は吟味され、茶は加工の進歩により製品がどんどん洗練されていった[古林 1995: 249]。

⑧ 茶の生産の全国分布

茶樹は植物のひとつであり、温度・土壌・日射などに影響をうける。茶の故郷は雲南や四川など中国の南部であり、暖かい土地が生育に適している。茶の栽培学の観点から、茶の栽培に適した条件をまとめると、おおむね以下ようになる。

温度：20—30℃

降水量：年に 1500mm 前後、毎月平均 100mm 前後

湿度：75-80%前後

土壌：酸性、ph4.5-6.5

この条件からすると、中国国内では南部福建や広東、広西、雲南、四川、重慶、安徽、江蘇、湖北、湖南、江西、浙江省などが、茶の栽培に適する地といえる[童 1979: 12-15]。唐代は現在に比べ平均気温が高かったが、宋代から 12 世紀初頭にかけて唐代よりも平均気温が 2-3 ℃下がり[棚橋 2003: 85]、浙江省湖州²²を中心に生産していた茶は、福建省など中国のさらに南で生産されるようになった。しかも、福建省など中国の南部は、当時まだ森林の開発がおくっていたため土壌が富んでおり、雨量も富んでいて北方よりも湿潤であることなど茶葉の生育にとって有利な条件が整っていたため、やがて茶葉生産の中心地となった[孫 2001: 20-22]。茶書で取り上げられている茶の産地も、中国の南部が比較的多かった[童 1979: 6-7]。南部における茶区面積の拡大因としては、さらに中国の経済の中心

²² 湖州は、唐の陸羽が活躍した土地のひとつであり、現在でも陸羽茶文化研究会が存在する。

が南部にうつり、隋の煬帝による運河開通により、南北の物資の交流が可能になったことも考えられる。

南部の中でも、福建省建安が宋代の茶生産の中心地であった。建安の現在の気候条件は中亜熱帯気候で季節風があり、日照時間が長く、河川も多い。気候は温暖で雨量はゆたかであり、冬季の寒さも夏季の暑さも厳しくない。年平均気温は 18-22.3℃で、年降水量は 1200-2000mm、年平均相対湿度は 70%-80%であり、土地の 85%は山地である。地味は pH で 4.5-6.5 である[王 2000: 332]。こうした風土からして、建安が茶の栽培に最適であることがわかる。

一方、茶は現在でも清明節²³の前が最高の美味とされ、清明節の前の茶は「明前茶」とよばれ、特に尊重される。宮廷に茶を納める貢茶の制度でも、清明節の前に新茶が届くか否かが非常に重要であった。唐から 3000 里から 4000 里²⁴はなれた土地から早馬に鞭を当てて 10 日で唐の首都西安に茶を届けられたという[巩 2003: 8]。建安もまた北宋の開封から 3000 里も隔たっていたが、それでもなお 3 月には宮中の人々は新茶を賞味することができた。

福建省の建安の貢茶については、北宋以前の 937 年と 946 年にすでに記録があるが、建安の地方誌によると、建国直後の 977 年、初めて竜焙²⁵を置き竜風茶をつくった。貢茶量は約 150 t とされ、貢茶のための官営茶園は、建安の中の北苑にあった。これらの貢茶のための茶を竜鳳茶と称する[棚橋 2003: 85]。『東溪試茶録』によると、建安には古くから 38 の官焙があり、民に茶をつくらせたため民は非常に苦しんだという。[宋子安(生没年不詳)1048 年以後: 2 丁左-3 丁右]。

建安が北宋の茶の中心地となったことは、例えば以下の事実からしても明らかだろう。すなわち、北宋の茶書 25 編のなかで、建安の茶について述べたものが 14 編、全体の 56% にものぼっているのである[朱自振 1995: 59]。さらに建安では、正確な年代は不明だが、1 年間で 20-30 t、うち竜鳳茶を 2-3000 枚(計 150kg)生産していた[棚橋 2003: 85]。宋の茶区は、長江流域と淮南一帯であり、福建路に加えて江南路や淮南路、荊湖路、両浙路、福建路などを中心としていた[王沢農 1988: 179]。福建の片茶は高級品として重視されていたとの指摘はあるが[高橋 1989: 252]、生産量の面では突出しているとはいえない。『宋会要』に南宋初期(1162 年)の各地区の全国産茶量の統計がある。それによると、南宋 1162 年の全国産茶量は 8331 万 t であり、建安をふくむ福建路の産茶量は 490 万 t、さらに福建路の

²³新暦の 4 月初めごろをさす。2004 年を例にとると 4 月 4 日であった。中国では連れ立って墓参に行く習慣があったが、清明説前後の茶は非常に美味とされ、古来から珍重されてきた。

²⁴唐代:1 里=559.8m、宋代:1 里=552.96m であり[于永玉 1990: 524-528]、実際の距離と異なっているかもしれないが、三千には長いこと・多いことという意味がある。

²⁵皇帝のための茶製造機関である。

なかで建安をふくむ建寧府の産量は 475 万 t しかなかった[宋 南宋年間: 29]。つまり、福建とりわけ建安の茶葉は、貢茶の中心品目であったことからわかるように高品質であり、南宋の人々から歓迎された。しかしながら建安の茶は、その生産量は決して突出して多いわけではなかった。建安の茶は、ごく少ない高級品として、珍重されていたのではないだろうか。

⑨ 生産量

次に唐と宋の茶の生産量を比較してみよう。唐代の平均茶葉の年間産出量は 700 万 t であった。唐代の平均年間生産量 700 万 t に比べ、北宋後期の年間生産量は 8355 万 2000t と飛躍的に増加し、じつに 10 倍以上になっている。その背景には、960 年に宋の太祖趙匡胤が都を河南省の開封に定めて以来、唐代に引き続いて農業重視の政策をとったことがあげられる。この結果、農業生産の発展は目覚しく、山地の農民は階段状の田畑を造成してここに茶樹を植えたため、茶園面積は拡大し[陳 1984: 52-67]、かつ茶の生産技術の向上もめざましいものがあった[陳 1984: 187-188]。

また宮中に茶を納める制度である貢茶の際の茶の納入量を例にとると、唐代には 9.204t であったが、北宋初期 976 年前後は建州北苑の貢茶量は 50 斤 0.025t と低かったものの、1098-1100 年には 9 t、北宋末期の 1119 年から 1125 年には 23.55t に達している[水野 1985: 196-197]。

⑩ 生産形態

唐代 862 年にすでに、農家は主穀生産専門の戸と茶葉生産専門に、分業する傾向がみられ始めた。おそくとも 9 世紀半ばには、北方における飲茶の普及による需要の増大に伴って、茶業の専門経営が成立していた[井上 1990: 44-45]。宋の茶園は、民間による茶園と国家による茶園の 2 種類に大別されるが、これらの状況について、説明をこころみたい。

例えば前述の福建の建安では、茶園が 1336 箇所存在したが、なかで官営の茶園はわずかに 32 箇所あまり、他の 1304 箇所におよぶ茶園は民営であった[巩 2003: 10]。建安では所定地にある官営の茶園を官焙や正焙、それ以外の場所に存在する茶園を外焙、私焙と呼んで、はば広い茶市場むけの茶を生産していた[古林 1995: 251-252]。茶は多年生の植物ゆえ、一度栽培に成功すれば、採取の時期を間違えないかぎり数十年も安定した利益をもたらすともされる。それゆえ、茶は農家にとってたいへん魅力的な換金作物であった。民間による茶園が数多く存在した所以である[孫 2001: 25]。

兼業茶葉生産農家: 民間による茶園のなかにも、茶と養蚕などを兼業する農家もあった。兼業茶農家は、かならずしも零細個人経営とはかぎらず、むしろその多くは地主だった。兼業農家全体の茶の産量は決して少なくなかった [孫 2001: 25-27]。

当時の茶生産技術の向上に伴って、兼業茶葉生産農家は専門茶葉生産農家に転向することも多かった[孫 2001: 27]。後者の名称は茶園戸である。当時、茶は政府による専売法がひかれており[佐伯 1977: 26]、生産された茶も政府の売茶場を通じて売買される建前であ

ったが、茶農家が自ら引を購入して販売に従事する場合もあり、生産者である茶農家の営利意識を認めることができる[水野 1983: 41]。宋代末期 1077 年、四川において一軒あたり 175t 程度の茶農家がほとんどであったが、なかには 500t-1000 t にのぼる農家も少数ながら存在した[孫 2001: 29-30]。

一方、寺院による茶葉生産についていえば、飲茶の習慣が普及した時期は、一般の人よりも僧侶のほうが早く、かつ寺院は巨大資本をもっており、寺院が茶の栽培に占める割合は非常に大きかった。一例をあげると、北宋末期の福建では、寺院による茶園は民間の茶園の 1/3 を占め、多いときは 1/2 にのぼった。当時の福建の山地田畑は 3024 頃 71 畝あったとされるが[和田 1960: 97-99]、その 28% を寺院が占め、僧侶 1 人当たり 165 畝所有している計算になる。同地の民間の茶園では、茶業に従事している者 1 人当たり約 14 畝であったことからすれば、この数値は大きなものといえる。福建の民間所有の山畑園林の 21.9% が寺院所有であった。寺院のなかでも生産が年間 0.25t にみまない小資本の場合は、自家消費が中心で利潤は少なかったが、年間 0.25t を超える寺院の場合は、茶は寺院にとって重要な産業となっていた[孫 2001: 37]。茶業全体の発達にとっても寺院の存在は無視できないものであった[陶 2001: 252]。

⑪ 生産された茶の流通と各生産地域の茶の価格

宋の茶の流通制度では、茶は大きく官茶と私茶の 2 つに分類される。官茶とは、茶の国家専売制度下に公式に取引される茶であり、私茶はいわばヤミ茶である。流通する官茶にはさらに、榷茶法によるものと通商法によるものと 2 種類があった。榷茶法とは生産・運搬・販売をすべて政府の手で行う専売法を指し[星 1988: 26]、通商法は、政府が商人に茶を売り渡すとき、税金を徴収した後は、多少の統制はあるが商人が割合自由に販売することを許す方法である[星 1988: 179]。榷茶法のほうが通商法より官の規制が強かったとされる。

また、官茶と私茶の価格差²⁶、とくに出荷時と購買時の価格差は、例えば四川省の場合、表 2 のように実に 6.16 倍となっている。さらに、出荷時と購入時では価格差が著しく、例えば片茶の建州産の A 級品の出荷価格は 135 文、売買価格は 500 文と、出荷時の 3-4 倍になっていたという[孫 2001: 134-150]。

前述したように、茶は専売制であり、茶引すなわち茶の販売の許可のための切符を政府からもらった者しか、建前上は茶を売買することはできなかった。茶引を使って茶の売買をする場合、割り増し料を加えたため、官茶は私茶に比べて高かった。茶は非常に利益率の高い農作物であった。

⑫ 茶の専売制度下での流通機構

宋の国家による茶の専売制度において、最も強く中央政府の規制を受けた榷茶法では、

²⁶官茶の価格は公式の記録に残りやすいが、私茶の価格は性質上記録に残りにくい。

榷貨務が茶の取引をすべて管理した。榷貨務とは首都に置かれた役所のひとつで、職務は、客商が地方の取引に赴く場合、銀を徴収して、代わりに茶販売許可の手形を支給する、あるいは茶、銭、布などを官に徴収して、それによって茶販売許可の手形を与えることにあった。これによって、中央政府は貨幣の調整と財物の獲得を行うことができたのである[星 1966: 45]。榷貨務は生産者である園戸、茶の取引所である榷茶場、販売区である鎖区のすべてを管轄下においた。すなわち官が生産者に資金を提供し、生産者は製品の一部を物税として納入するほか、他はすべて官に売り渡し、官は榷茶場で制限をつけて商人に売り渡すのである。

他に、通商法も施行された。これは官から生産者に資金は与えず、商人と生産者が自由に取引し、商人が専売税を払うことをさす。ただし、まったくの自由取引ではなく、官から価格・取扱量・販売地などについてこまかな制限を加えられ、榷茶法と同じように、茶の販売商人は榷貨務が発行する茶販売許可手形の携帯を義務づけられた [梅原 1972: 4]。

もともと、茶は非常に商品価値が高い産物であり、かつ宋代の人々にとって生活必需品となっていたから、私茶もつねに流通し、むしろ専売制度下の茶よりも高級品が多いとされてきた[古林 1987: 99-100]。

3-2 宋代茶文化 —— 茶館と闘茶

次に、宋代の茶文化を代表する現象面として、茶館と闘茶について述べたい。

中国の茶館の歴史をさかのぼると、南北朝時代（389-589）に現在の茶館の雛型ともいえる「茶寮」が早くも出現したとの考えもある[姚国坤 1994: 163-169]。しかし、茶館が文献に初出するのは陸羽と同時代の『封氏聞見記』²⁷であり[陳 1984: 275]、[姚 1994: 165]、禅僧が修行時に眠気を取るために摂取したことから、一般人にまで普及したという⁽¹⁾。唐代にはじまった茶館には多くの別称があった²⁸。

宋代（960-1279）には、茶の形態は、唐代と同じ固形茶・散茶(葉茶)が半々で、茶碗に固形茶を粉末にした茶の粉を入れ、上から湯を注ぎかき回して飲んだ。前述したように、これは現在日本の茶道における抹茶の飲み方とほぼ同じで、日本の茶道の原型が中国の宋代の喫茶法とされる所以である[布目 1995: 264]。

当時の小説には、このような茶館の広範囲な普及について述べたものもある²⁹。

時代が移るにつれて茶肆はますます洗練の度を加え、南宋の首都杭州の茶肆は、四季の花や絵画などが飾られ、優雅な様子であったという[施耐庵(生没年不詳)14世紀: 85]。中村喬は、宋代の「茶肆」は、今の茶館、すなわち喫茶店に相当し、「茶坊」とも呼ばれ、処々に開かれていたと指摘している[中村 2000: 418-420]。やがて都市の発達に伴って、茶館もまた広く市民に普及し、活気を見せていたともいう。茶館もさまざまに機能が分かれ、南宋の首都臨安（杭州）の繁盛記である呉自牧の『夢梁録』（前述）は、当時の茶館を「茶楼」「人情茶坊」「市頭」「花茶坊」と、高級クラブ・一般の茶館・職人が職を求めて集まる茶館・娼家と分類している⁽²⁾。そこからは市民生活がそれなりに爛熟し、茶館もただ茶を飲むよりは、職安・売春宿などの機能を兼ね備えていた様子が見えてくる。とくに「茶楼」は現在の会員制クラブに類似しており、客層は富豪の子弟や諸官庁の当直にあたっていない役人が中心で、一般人は少なかったと指摘されている[岸部 1961:(下) 131]。

宋代に茶館が隆盛した原因は何か。おそらく、商業活動の繁栄によって導き出された市民生活の多様化に対応する装置として、茶館の需要が高まったのではないか。つまり、クラブ的要素が大きいものであったように考えられる。余悦は、北宋の都開封は政治・経済・

²⁷ 『封氏聞見記』は唐代の書名である、作者封演(生没年不詳)は天宝年間（742-56）の進士であり、刺史（州の長官）となり貞元時（785-804）に御史中丞（御史台の次官）となった[徐海榮 2000: 576]。

²⁸ 茶館は、また茶肆、茶寮、茶坊、茶楼、茶屋などと称する[徐 2000: 572]。

²⁹ 姚国坤は、宋代は茶肆、茶坊など茶を売ることによって商売をする店はすでに普遍的になっており、宋代の平民起義の古典的名著である『水滸伝』のなかの、王婆が茶坊を開いたとの記述の中に反映されていると指摘している[姚 1994: 165]。

文化の中心であり、また交通の要道でもあったので非常に活気があり、商業活動の繁栄と結びついて宋代に茶館が興隆したという[余悦 1999: 68]。

さらに当時の茶館の状況について、単なる休憩・社交の場を越え、情報交換・取引・集会・仲裁の場などの社会的な機能も果たしてきたこと^③、茶館の普及は都市の発達と市民社会の成立に促されたものであったとの指摘もある[西澤 1988: 110-113]。孟元老(生没年不詳)の『東京夢華録』においても、茶館が商取引に使われていた記録がある。

前述のように、宋代は農業重視政策の結果として茶の生産量の拡大、茶生産技術の向上によって、茶はより市民生活の中に普及し、市民生活の多様化に伴って茶館はさまざまな社会的機能を要求され、普及したものと考えられる。

北宋・南宋の茶の淹れ方は点茶法で、これは固形茶を粉末にした後、茶碗に粉末の茶を入れ、上から湯を注ぎかき回して飲む方法であった[高橋 2001: 96]。点茶法は、もともとは民間起源であるが、それを全国的に普及させたのは、『大観茶論』をまとめた前述の徽宗皇帝であった。

宋代の宮中においては、「闘茶」すなわち茶の品質の比較競争が盛んにおこなわれ、良質な茶がつくられるようになった。「闘茶」は宮中から民間にまで普及し、多くの人がよく茶を賞味するようになった[布目 1976: 11]。

闘茶とは、簡単に述べると茶のテイスティングであるが、単に茶の品質のよしあしを比べるだけで、茶芸すなわち中国茶道の手前の優劣をも評価の対象とした、茶の飲みくらべ競技である。闘茶では高品質の茶と熟達した茶芸がともに要求されたため、茶芸を競う闘茶は民間の娯楽のひとつとして発展してきた[吉 1984: 7-12]。こうして実用から出発した闘茶は、次第に芸術の域にまで達し、点てる茶によって使用する茶碗の色もきまり[于 2003:58]、茶せんはもとより、茶を注ぐときに用いる茶瓶にまで厳格な規定があった[郭孟良 2003:84]。

闘茶の実際の方法は概略、以下の順番に従った[余彦焱 2001: 58]。

- ① 茶碗を温める。
- ② 茶碗に油を塗る。
- ③ 一定量の粉末にした茶を、茶碗に入れる
- ④ 茶碗に沸騰させた湯を注ぐ。
- ⑤ 茶碗をかき混ぜる。
- ⑥ 茶碗の表面の泡の色を鑑賞する。

③-⑤の過程においては、茶碾を用いて挽いた固形茶の粉末を茶碗の中に入れ、沸騰した湯を入れて茶せんでかきまぜ、後に適量の茶の粉末を投入し、湯を注ぎながら練りあげていった[吉 1984:7-12]。

これらの過程を経ておこなわれる闘茶の判定基準^④は、点てた茶の表面の泡すなわち湯

花が白いか否かにおかれていた[姚敏蘇 2002:146]、[阮 2002: 15-17]。点てた茶の表面を白くするにはひとつの秘訣があった。それは、茶を清潔な紙に包んで密封し、茶を淹れる直前に茶碾で挽くのである。この方法で、淹れた茶の色は白くなる。ただし、あらためて指摘するまでもなく、挽いてから時間をおいてから茶を淹れると、茶の色はにごってしまう[蔡 1064: 2 丁右]。

闘茶をおこなう際には、茶碾を用いて固形茶を粉末にする作業が不可欠であり、茶碾の登場からは、同時に闘茶も行われていた確率が高いと思われる。

闘茶で高評価を得るのに不可欠の茶道具の茶碾は、どのようなものであろうか。端的には薬研である。唐代の陸羽の茶書『茶経』によると、茶碾の形は「内側を円く、外側を四角くして、内側に輪を運行させ茶を粉末にする」とあり、北宋時代にも、形状に大きな変化はなかったようである[陸 758:巻 4、8 丁左-9 丁右]。

一方、材質は、おなじく『茶経』に、「碾は楠でつくり、梨、桑、桐、柘植がこれに次ぐ」とあるように、基本的に木製だったとある[陸 758:巻 4、8 丁左-9 丁右]。だが、北宋の時代には固形茶がより固くなったため、これに見合う形で薬研に金属が用いられるようになったのである⁵⁾。

宋代の趙孟頫(1254-1322)の「闘茶図」(図 11)は、宋代に盛んに行われた闘茶、すなわち茶のききくらべを題材とした絵であるが、背景には宋代は茶の栽培面積が唐代にくらべて大幅に増加し、宮中に茶を上納させる貢茶の制度とともに、茶の生産技術は大幅に進歩した。作者の趙孟頫は南宋の皇族の末裔で、浙江省湖州に長い期間居住していた[石泠 2002: 24]。茶は一部の人から大多数へ普及し始め[陳 1984: 425]、それによって、闘茶図が示すように、市井でも闘茶が盛んになった。男たちは茶をとり、口に含んで評茶をしているが、飲まれている茶は粉末状の抹茶である。宋代の市民文化の開花は茶文化にもおよび、茶がもはや一部の人々の独占的なものにとどまらず、一般の市民の間に普及し始めていた様子にうかがえる。

では、なぜ 3-1 で述べたように、宋代に政府が榷茶法や通商法を行い、茶の流通による権益を独占しようとするほど茶の消費が盛んになったのであろうか。宋代の北宋に茶の加工法の進歩により、闘茶が高官から一般の人々にまで普及したと無関係ではないと思える。茶の品質向上と闘茶の普及については、『大観茶論』が、中国の研究者では阮と劉昭瑞が記述している[阮 2002: 16]、[劉昭瑞 2002: 138]。闘茶の普及と茶の需要拡大の関連性については、『大観茶論』が[趙 1107: 1 丁左-2 丁右]、先行研究で施がそれぞれ論じている[施 1999: 36]。宋代の茶の加工法と流通の関連性については、福建の事例を取り上げて古林森広が考察している[古林 1995: 248-276]。闘茶の起源は、宋代の最高品質の茶の生産地とされる福建省の建安にある[施奠東 1999: 36]。はじめは建安の民間でおこなわれていたようであるが[高橋 2000: 55]、次第に建安の官僚が、皇帝のために茶の絶品を生産するための茶の選別手段として、闘茶が盛んになったという[阮 2002: 16]。

いわば高品質の茶を生産するための手段であった闘茶であるが、しだいに本来的な役割は失われ、やがて最高品質の茶を用いることが要求されるようになる。『大観茶論』は、茶の芽の極上品を闘茶に使用するものと述べている[趙 1107: 3 丁右]。闘茶に用いる茶は、色・味・形についての厳密な規定があった[王 1993: 182]。例えば、茶を淹れる前の固形茶の色(青・黄・紫・黒)などである[劉 2002: 131]。そして、淹れた茶の味・香・色のすべてが最高水準であったときに、はじめて闘茶の勝利者になれるのである[劉 2002: 138]。『大観茶論』には、福建の建安で茶が普及して茶文化が発達したことも示されているが^⑥、そこには高品質の茶が生産したことによって、闘茶や茶芸の技術水準も上昇した当時の状況がうかがえる。闘茶に用いる固形茶は、十分に選ばれ研究されたものが見つかわれたが、そこには加工技術の進歩と闘茶の関連性についての指摘もある[施 1999: 36]。

福建の建安で始まった闘茶は、北宋の中期以降、徐々に中国の北方にも伝わり、またたくまにことには官僚や貴族から、文人墨客、さらには一般の人々の間にまで普及し、人々は夢中になった[施 1999: 36]。また、闘茶の普及によって茶自体がどれだけ普及したかについては、当時の茶書『大観茶論』が、無風流な人物にまで茶が普及したと述べ^⑦、陳椽は、徽宗皇帝趙佶の時代以降、貢茶にかぎってもますます生産量はふえたと指摘している[陳 1984: 425]。徽宗皇帝趙佶は、『大観茶論』のなかで闘茶の技術について詳細に述べた皇帝だが、『大観茶論』の指摘にも、闘茶の普及と生産量の増大の関連性がみられるのではなかろうか。

闘茶が奢侈と浪費であるとの見解もある[劉 2002: 130]が、それは闘茶がある程度普及していたからこそその意見であろう。闘茶がどれだけ人々の間に普及したかを示す数値は、記録に残されていない。しかしながら、一次資料から、上層部から一般の人々にまで闘茶が浸透し、さらにそれも少なくとも茶の流通を促進させたひとつの要因として推測される。

3-3 宋代茶文化の伝播 ——宣化遼墓壁画を事例として

次に、宋代の茶文化、とりわけ闘茶の風習が周辺の国に伝播した事例として、遼代の高官の壁画と闘茶の関係について述べたい。

1974年、中国北方の河北省張家口市宣化県下八里村から、遼代の高官一族の墓が、大量の墓室壁画とともに発見された。それは遼王朝の漢族高官であった張世卿（1050年前後-1126）と一族が埋葬されている墓群である。宣化遼墓壁画は保存状態が非常に良好で、彩色もまた鮮やかであり、遼代の上層部の日常生活をそこに読み取ることができる。

とりわけ注目を集めたのは、茶器を用いて茶を入れ、あるいは茶を飲む光景を描いた茶道図であった。同絵画には多くの茶器が描写されており、遼王朝においてすでに茶を飲む風習があったことの歴然たる証拠となった。

中国絵画における茶道図は決して少なくないが、その特徴から大きく3通りに分けることができる⁽¹⁾。

- ① 一般的な絵画。
- ② 茶書の挿絵としての図版。例えば、茶のバイブルとされる唐代の陸羽著『茶経』、南宋の審安老人著『茶具図贊』などといった茶書の中にも、茶の製法や入れ方に関する表現が散見される。
- ③ 墓室の内壁画。宣化遼墓や河南白沙宋墓、北京石景山金墓など。

③に分類される宣化遼墓壁画の特色は、つとに指摘されているように、当時の生活における飲茶の情景、すなわち実際に茶を入れるところから飲むところまでを描いた、数少ない造形資料のひとつである[董 2002: 215-219]。数多い茶道図の中でも、茶が遼代中国の北部少数民族の間で実際にどのように飲まれていたかを示す造形資料は、他にほとんど知られておらず、文献資料でも明らかにできなかった。そのかぎりにおいて、これはきわめて貴重な資料といえる。

改めて指摘するまでもなく、過去の茶文化を知ろうとする際、文字資料だけでは、茶具の形や茶の点て方、実際には誰がどのように茶を淹れたのかなど、飲茶慣行の実際をはっきり見定めることは難しい。しかし、1970年代から80年代にかけて発見された墓室内壁画によって、茶の点て方の実態がわかるようになった。とりわけ宣化遼墓壁画は、中国茶の実際の飲用法を知るうえできわめて高い資料的価値が認められる。

宣化遼墓壁画の茶道図、とくに茶を準備する・淹れる・飲むなどの飲茶に関しては、すでに鄭紹宗[鄭(出版年不明): 30-51]や沈冬梅[沈冬梅 2004: 私信]、あるいは呉光榮[呉光榮 2004: 143]などが分析を行っている。2004年8月、著者は日本茶の湯文化学会の訪中団の一員として宣化遼墓を訪問し、宣化遼墓壁画を実見した。

ここでは、以上の研究成果と実見を踏まえたうえで、宣化遼墓壁画に見える「茶碾」（固形茶を粉末にする一つの道具）に焦点を当て、当時少なくとも遼代の上層階級において、闘

茶が盛んに行われていたのではないかとの、著者がかねてより抱いてきた仮説を立証しようとするものである。

遼代の壁画を分析するにあたっては、契丹族と遼王朝の関係について考慮する必要がある。契丹族は、中国東北地方の歴史に大きな足跡を残した遊牧民族である³⁰。

唐代の末期のいわゆる群雄割拠時代、彼ら契丹族は、遼河上流に遼王朝(916-1125)を建国し、さらに領土を今日の中国の東北地方、内蒙古、河北、山西北部一帯に広げ、中国大陸北方に覇を唱える一大勢力となった。

建国以来、遼は北宋王朝と朝貢や貿易によって誼を通じたが、時には互いに戦いもした。遼の領土内には、契丹族に加えて、多数の漢族が混住しており、契丹族は文化面や生活面の上で、これら漢族の影響を少なからず受けていったとされる。

遼王朝は北方の契丹族の政権であるにもかかわらず、王侯貴族も芸術を好むものが多かった。例えば世宗耶律阮(918-51)は絵画と音楽に詳しく、聖宗耶律隆緒(971-1031)は詩文・弓・音律・絵画に精通し、騎射・人物画の名手として北宋にまで名を知られていた皇族さえいたとも記録にあり、遼の王侯貴族がこぞって絵画を愛好したために、宮殿や墓室は沢山の絵画に囲まれていた[楚 2002: 165]。

遼王朝と茶に関しては、924年に契丹人が茶と薬を中国に求めたとの中国の地方官の報告が最古のものであり[王欽若 1013: 11725]、はじめは茶と薬は同じように用いられたように思われる。もともと契丹には、茶はまったく産出しないので、遼の人々が飲んだ茶は、すべて中国からの輸入品であった[田村 1964: 417]。938年にも、遼王朝が官貿易で茶を輸入した記録があるという[島田 1952: 337-338]。

1070年前後には、遼王朝の上層階級は、茶の中でも北宋で珍重された固形茶を特に好むようになったと記録されている[張舜民 1100年前後: 13-14]。ほぼ同時期に、宋王朝からの使者を迎える儀式のときに茶が用いられ[脱脱 1345: 852]、さらに皇太后・皇帝の誕生日の朝賀の儀式にも茶が用いられたことが記されている[脱脱 1345: 867-869]。史書の記事からも、遼王朝の宮廷内部の儀式において茶が用いられていたことがうかがえる。

だが、遼王朝で茶を飲んだのは、一部の上層階級だけではなかった。『宋史』には、1100年前後には遼王朝の一般庶民も、肉を食べ乳製品を飲む人たちの薬として、茶を好むようになったと好むようになったと記録されている[脱脱 1345: 3969]。遼王朝の上層部から、仏僧や道士をとおして、さらに広く一般民衆に茶が普及して生活の中に定着し、遼王朝の都市の中には多くの茶館もあったとの指摘もある[鄭(出版年不明): 30-40]。宣化遼墓が造営された1117年前後にも、北宋と遼王朝は交易が盛んであり、遼の地に北宋の茶文化が波及していった[于 2003: 83-89]。

³⁰ 契丹という語は「鉄」を原義とし、転じて「堅固さ」を意味する[王建中 2004: 143]。契丹の旧俗は馬によって富み、兵によって強しと記録されている[脱脱 1344: 923]。

遼代の実際の茶の飲み方は、中国の唐代の流儀と北宋のそれを混在させており、いわば両者の混在形であったとも考えられる。中国社会科学院の沈冬梅氏は、北宋と遼の茶を淹れる方法を比較し、双方ともほとんど同様であるが、ただ茶を砕く道具と茶碗の色のみが異なっているとし、理由として、茶を生産しない遼においても宋との国境付近において相互に交易を行っており、遼の社会の各階層に飲茶の習俗が普及したためであると述べている[沈 2004: 私信]。飲茶の盛んな北宋との交易を通じて、中原文化の影響を受けた遼王朝において、やがて飲茶文化が一種の茶道にまで発展していったのではないか。

前述したように、契丹族は遊牧民族であるため、元来墓を建築して死者を厚く葬る習慣はなかった。しかし、遼王朝開闢以後、死者を葬るにあたり、次第に墳墓建築を行うようになった。やがて墓室の規模や副葬品の豪華さは、中原北宋王朝のそれを凌ぐようになり、内壁画がある墓室もまた非常に増加していったと思われる。

壁画は、被葬者が契丹族であるか漢族であるか、図柄の題材、制作年代(唐代の影響が残る遼王朝の前期・遼の最盛期である中期・漢族の影響がつよい⁽²⁾後期)などによって、壁画は分類することができる[楚 2002: 168-174]。

上述の分類によれば宣化遼墓は、漢族の墓である。壁画の題材は四季の景色や宴会の情景、楽師たち、狩猟の行き帰りの情景、花鳥風月などが中心で、遼代後期の墓室といえる。

宣化遼墓の墓群は、1号墓から15号墓までの計15基からなるが、2004年8月現在、発掘作業は12号墓までしか進んでいない⁽³⁾。それまでの調査結果がすでに公表されており、本論での分析対象は、1号墓から10号墓までである。2004年8月に筆者達が見学を許可されたのは、公開された1号墓と10号墓のみで、他は発掘作業の後、再び埋められてしまっている。1号墓と10号墓の墓室内は温度が16度で、墓の外が華北の土ぼこりがとびかうトウモロコシ畑であるのと反対に、非常に涼しかった。温度と湿度が低いことが絵画にとって良好な保存条件を保っており、これが現在なお絵画の分析を可能にする要因となっている。

1号墓⁽⁴⁾は、張一族の族長たる漢族の高官、張世卿の墓室である。墓誌によれば、張世卿は字を虚白といい、遼の1126年正月4日に死去し、同年4月に埋葬されたとある。官位は国士祭酒兼監察御史。堂々たる政府高官であった[河北省文物研究所 2001b: 7]。

一方、10号墓の主である張匡世(生没年不詳)は、張世卿の祖父である。死去した時点では無官の学者であって、別の場所に簡単に埋葬されていたものを、後に孫の張世卿が栄達をとげたため、改めて厚く葬られたものである。副葬品は張世卿に比べてやはり書斎具が多く、総じて質素な印象を与える。ちなみに、張一族は遼王朝と非常に緊密な関係を保ち、張世卿の孫は遼王朝の皇女と婚姻関係を結んでいた。

ここで、張世卿が埋葬されている宣化遼墓1号墓を例にとると壁画の数量と規模は、前室は東西南北に1枚ずつ4枚、後室は5枚合計9枚で、1枚がほぼ縦1.7m、横が2.5mと非常に大きく、筆者が実際に観察したときも細部まで明瞭に識別できた。壁画の総面積は

1号墓から9号墓までの合計だけでも300㎡あまり、登場人物は206人。内容も天空図・埋葬者の外出や読経の情景、子供の縄跳び、宴会の準備、茶を淹れる準備など多岐にわたっている。天空図は、中国の28宿とともに古代バビロニアの黄道12宮もあって、インド仏教の伝来と密接な関係の存在があった[河北省文物研究所 2000: 103-126]。被葬者の一族は篤く仏教を信じ、張世卿・張文藻は毎日経文を唱えることを日課としていたと指摘されている[鄭(出版年不明): 51]。埋葬者張世卿自身は漢族であるが、壁画には遼代の契丹族の特色が現れており[楚 2002:168-174]、宋王朝の周辺の国における中国茶文化受容の絶好の一例といえよう。

壁画の茶道図の構成をみると、宣化遼墓の張氏一族の墓群からは副葬品が計300あまり、茶に関する品は50以上あり、被葬者たちが茶を好んだことがうかがわれる[姚国坤 2004: 220]。また、宣化遼墓の壁画の中には茶道図も多く見られ、遼王朝において飲茶が重視されていたことを反映している。墓室内は意外にも狭かったが、壁画一面に等身大の人物のいきいきとした動作が描かれており、圧巻であった。登場人物の多くは召使たちで、その他の人物像も髪型と服装から、判断できる。また、一見しただけでは茶器か酒器か簡単にわからない道具も描かれていたが、河北文物研究所に所属し発掘を指揮した鄭紹宗氏によると、他の遼代の絵画と比較して酒器より茶器が多いという[鄭 2004: 私信]。茶に関する壁画には、茶を淹れる準備や茶を淹れている様子、茶をすすめている絵画、女性が宴会の指揮している絵画などがあり、茶具を実際に用いて茶を淹れるプロセス、茶を選んで粉末にし篩にかけて淹れるまでの一連の工程が、克明に描写されている[于 2003: 83-89]。中国の北宋の茶文化が、北方の隣国遼王朝においてどのように受容されていたかを検討するための、貴重な絵画資料といえる[河北省文物研究所 2000: 103-126]。

第1号墓-第10号墓までの壁画の中で、代表的な茶道図を解説する。

- ① 1号墓 幅1m、高さ1.25mで、絵の正面に赤く高いテーブルがあり、テーブルの上には白い茶碗と黒い受け皿などの茶器が置かれて、黒白のコントラストをなしており、2人の従者が主人のために茶を淹れる準備中で、左の女性はドアを開けて部屋から出て行くところである。
- ② 2号墓 幅1.12m、高さ1.58m。絵の右側に赤く、高い長方形のテーブルがあり、テーブルの上には白い6つの茶碗と受け皿などの茶器が置いてある。画面は3人で構成されている、契丹族の官吏、漢族の官吏、子供の召使である。比較的簡単な構成で、子供の召使が2人の主人のために茶を準備している。
- ③ 5号墓 幅1.62m、高さ1.57mで、画面の中央には正方形のテーブルが描かれ、上には赤い重箱上のものが積み重ねられている。3人の年齢がさまざまな女性が、茶を淹れる準備をしながら談笑している。
- ④ 6号墓(図13) 幅1.95m、高さ1.59m。茶器や家具で画面が構成されている。登場人物は計5人。契丹族の中年の男性、契丹族の子供の召使が2人、漢族の子供の召使、

漢族の中年の女性である。漢族の子供の召使が茶碾で茶を挽いている。

⑤ 7号墓(図14)幅1.45m、高さが1.70mである。登場人物は8人。なかで茶道に係っているのは計4人、1人の若く美しい女性と3人の子供の召使である。女性は画面の中央で指揮している様子うかがえる。あるいは女主人だろうか。茶碾で茶を挽いている子供は契丹族である。また、上からつるしてある籠から桃を取り出している召使もいる。7号墓の画中のテーブルの上には塩もあり、塩を茶に入れて飲んだ可能性もある。布目は、籠から取り出しているのは桃ではなく、天井から吊り下げられた固形茶を乾燥させるための籠から、下僕が紙に包まれた固形茶を取り出しているところであり、まもなく茶会が始まるので、緊張して準備を進めている情景であると指摘している[布目1998:69]。もしそうであるならば、壁画は固形茶が保存され、とりだされ、茶碾で粉末にされ、茶宴に供される場面を描いたことになる。

⑥ 10号墓(図15)は、女性2人と男性3人の計5人で構成されており、2人の侍女が茶托をささげ、漢族の赤い服を着た子供は召使が茶碾で茶をひき、契丹族の子供の召使が火をふき、契丹族の青年が湯を温めている。とくに6号墓(図13)、7号墓(図14)、10号墓(図15)の茶道図は、構成も複雑であり、かつ美しい。

宣化遼墓壁画の中で茶碾が画中に登場する墓室は、6号墓の墓誌盗難のため埋葬年代や氏名が不明の張氏一族の墓室、7号墓の1093年埋葬の張文藻墓、10号墓の1093年埋葬の張匡正墓の3基である。

宣化遼墓壁画中で、茶碾によって粉末にされている固形茶は、6号墓(図13)と10号墓(図15)の茶道図中には、見当たらない。それは、両墓室内壁画では、いままに茶碾を用いて固形茶を挽いている場面が描かれているためである[于2003:83-89]。7号墓(図14)には固形茶が登場するが、張世卿一族の遼王朝における地位を考慮すると、おそらく北宋政府が遼王朝にささげた貢茶である可能性が高い[鄭(出版年不明):41-43]。

宣化遼墓壁画中での茶碾の操作方法は6号墓(図13)にみられる。そこでは、絵の左前方に子供が座り、今まさに茶碾を使っているところが描かれている。座り方は半すわりで、日本の沖縄のブクブク茶を点てる時の座り方などによく似ている。茶碾の前には、漆塗りの盆が置かれており、漆塗りの盆の中には茶の粉末をふるうための篩が1つ置いてある[于2003:83-89]。

宣化遼墓壁画の茶碾の形と材質については、6号墓(図13)、7号墓(図14)、10号墓(図15)の茶碾をくらべると、6号墓(図13)が最も造形的に見て美しいともいえるが、ほとんど形に差異はみられない。台湾においては、宣化遼墓壁画の茶碾は、とっての形などが唐代から北宋への過渡期のものであるとの指摘もある[寥1996:53-54]。しかし鄭など中国の研究者は、法門寺から出土した唐代の茶碾と形はあまりかわりなく[鄭(出版年不明):30-43]、北宋の影響である[陶2001:256-259]、南宋の『茶具図贊』があげている「金法曹」(図9)茶碾とほぼ同様の形であり、中国の各時代の茶碾と大差ないという。とすれば宣化遼墓壁

画の発見により、北宋と同時代の遼においても北宋の茶碾が普及していたことになる[布目 1998: 72-74]。

また材質については、宣化遼墓の発掘を指揮した鄭によると、おそらく壁画の茶碾は鉄製であるという[鄭(出版年不明): 43]。北宋の茶書『大観茶論』では、茶碾に銀製について鍛鉄製を推薦していることから[趙 1107: 4 丁左]、宣化遼墓壁画の茶碾は、北宋の影響が強いものと推測される。

宣化遼墓壁画に見られる茶碗には白色のものが見られるが、これはいわゆる白瓷碗である。宋代の闘茶図(図 11・図 12)にも、ほぼ同様の茶碗が使用されている。

宣化遼墓壁画に見られる湯瓶についても、1号墓・2号墓・5号墓・6号墓(図 13)・10号墓(図 15)さらに宋代の闘茶図において湯瓶があり、1号墓では茶碗に入れた茶に湯瓶を使って湯を入れている場面が認められる。宋代の闘茶図においても、やはり湯瓶を用いて茶碗に湯を注いでいる。闘茶においては、茶の品質と同時に、茶の淹れ方すなわち茶芸の技術も、また勝負の決め手であった。南宋の『茶具図賛』があげている「湯提点」[審案老人 1269: 12 丁右]も、これまでの湯瓶とほぼ同様の形であった。

第4章 現代中国における茶文化と茶館

4-1 19世紀末期から20世紀中葉までの茶館

中国の現代の茶館の原型は、清代から中華民国期に成立したとされる。清朝は英明な君主が続き、長期安定政権のもと、生活は比較的安定していた。同時期のヨーロッパでは王侯貴族の間で飲茶の習慣が普及しはじめていた。清代前半の茶館は、皇族・軍人などの経済的にめぐまれた人々のひまつぶしの場だったが、康熙帝(1654-1722)・雍正帝(1678-1735)・乾隆帝の時代には、高位高官だけではなく、一般の労働者にも普及した[劉1995: 147]。そして清朝も後半になると、福建省・広東省などの中国の南部を中心として飲茶の形式が整備され、茶を飲むことは貴賤を問わず人々の間に楽しみとして広まっていた[武夷岩茶節組織委員会編 1990: 436]。こうして茶は、単なる水分補給や他の遊興の大義名分などの日常的な側面だけでとらえられるものではなくなった。

清代の小説『儒林外史』には、杭州の風光明媚な西湖周辺をめぐり、いくつもの茶館で干し筍・小麦粉製品・牛肉などの軽食を食べ歩いたとある[吳敬梓(1701-54) 18世紀:第14回]。同時代の茶館の絵として、清代茶館図がある(図16)。これは、市井の日常的な雰囲気の中で、大勢の人々が楽しそうに歓談している様子がみてとれる。茶は、非日常的に山中の仙人修行の場や書齋の哲学的談義のなかで飲まれるものではなくなってきている。また、中国で広く見られる鳥のなきくらべの風習が行われたことが、絵の中の鳥かごを持ちよって集まってきている人々の存在で分かるし、場面は朝であることもうかがわれる。絵の中に描かれている人物は、茶館の外の通行人・客・ものうりとすべて男性であり、女性はひとりも登場していない。女性の纏足が普及し、ひとりで自由に外出できなかったことも関係して、清朝では茶館は劇場と同じく男性のものとしてされていた。茶館では、結婚式や友人をもてなすこと、学術討論、政治討論、文藝発表会、ニュース交換、各国使節の接待などももてなしが行われ、現在の会員制クラブのような社会的機能をはたしていた[陳1994: 266]。

茶館の政治的な意味として、そこが情報収集の場でもあったという事実を忘れてはならない。つまり、時代の大きな波のなかで清朝が衰退しはじめた時期に、単なるひまつぶしや精神世界の問題以上に、人々の死活をにぎる貴重な情報収集・意見交換の場となっていたのだ。秘密の集会やアジトの場としての機能も帯びており、それゆえ権力者は茶館を注視するようになった。さらには19世紀末になると、茶館は地域社会における裁判所のような機能をはたし、用談・縁談や就職の斡旋などもおこなわれるようになった[老舍(1899-1966)1957: 360]。

また茶館の裏面として、賭博・カード遊び・人身売買などが行われ[吳1999: 30]、暴力団などの黒社会とのかかわりが強くなっていき、必然的に、一般の客が少なくなりはじめ

た³¹。茶館の低迷の原因としては、国家自体が戦争と植民地支配によって弱体化したことに加えて、欧米風的生活習慣がはいつてきたこともある。清朝末期に、すでにコーヒー館・西洋料理店・バー・アイスクリームスタンドなどが公園や街角などにでき、いままで茶館に娯楽・休息・水分補給をもとめていた客が、そちらにながれだしたこともひとつの理由であった[賈 2000: 205]。さらに茶葉の輸出量の変化は、清朝滅亡の 1911 年をはさんで大幅に低下しており、これも関連すると考えられる⁽¹⁾。

清朝の中国の茶館は、一条龍・清茶館・野茶館・茶園と茶楼の 4 種に分類され、一条龍は高級茶館で酒や軽食も出し、清茶館は酒しか出さないが、語り物や太鼓の実演があり、野茶館は野外の茶館で比較的廉価である。また茶園や茶楼は劇場の別名であるが、実質的には茶館であった⁽²⁾。

清朝の茶館の隆盛期に比べると衰えたとはいえ、20 世紀前半中華民国時代にも茶館はそれなりに活発であり⁽³⁾、中華民国時代にも人々が茶に接する場は高級なクラブのような茶館[内田 1964: 72-73]から街頭の茶売り⁽⁴⁾まで多様であった。同時代の杭州における茶館を、呉理人が絵画「茶館」に回想して描写している(図 17)。呉理人は 1930 年代に上海で誕生したものの、生後まもなく母方の実家のある杭州へ移り住み、生活の基本は一生涯杭州であった。絵画「茶館」の中でも茶館の客・従業員すべてが成人男性で、常連の客は老人が多く、毎日知り合いと談笑したり、将棋を指したりしてひまつぶしをする一方、自分の愛鳥を籠に入れて集まり、鳥のなきくらべをしたりする[呉理人 2002: 38-39]。清朝の清茶館の流れをくむとおもわれる。

中華人民共和国成立後、文化大革命以前の北京の茶館の状況もまた、清朝の伝統をくむものであった。中国に長期滞在した日本人が、当時の茶館について清茶館・貳葷舗・書館・野茶館・茶攤児の 5 種類をあげている。おそらくこれは清茶館は清朝の清茶館とほぼ同じであり、数こそは少なくなったが、まだ市場の中などに残っていた。貳葷舗は茶と料理の両方を出す、清朝の一条龍と異なり、高級な店舗ではなかった⁽⁵⁾。

³¹ 天地会はまた三合会、三点会、小刀会、或は洪門などと称し、異民族たる清朝の中国支配に反抗して十八世紀以降最も顕著な活動を見せた漢人特有の秘密結社である[佐々木 1970: 1]。

4-2 現代における中国茶文化と茶芸

現代中国の茶文化のあゆみは、国家の発展と密接に関係する。1949年の毛沢東による中華人民共和国の建国以後、1950年代から1960年代の大飢饉の時代を経て、1966年から10年間中国全土で文化大革命の嵐がふきあれ、音楽や京劇などの芸術活動は否定され、教育の機会は制限され、いかに成績優秀な人材であろうとも、大学進学のコツは非常に少なかった。文革の時代には、茶文化や茶館は共産主義に反するものとして否定されたのであった。

文化大革命のあと、1979年から農村の財政改革がはじまり、わずか3年で成功したとの指摘もあるが[余 1999: 169]、ともあれ中国経済は復興しはじめ、以後高度経済成長をつづけて現在に至っている。1970年代末期、北京や杭州などの中国の各地で茶館は徐々に発展し始めたが、これは東アジアの良好な経済状況を背景にして興った茶芸運動が中心にあった。

「茶芸」とは、前述したように茶器で中国茶を淹れて飲ませる技法をさすもので(図 18)、日本の茶道や韓国の茶礼に対応する言葉であり、茶の種類(竜井茶・その他の緑茶・ウーロン茶・紅茶・プーアール茶・花茶)、各地区(杭州・福建・北京・上海・台湾)によって、様々な流儀が存在する。1970年代末期、茶芸館と茶芸復興運動が台湾を中心にして興り、「茶芸館」なる「茶芸」を行なって中国茶を淹れて飲ませる中国風の純喫茶店をもみられるようになった。「茶芸」が誕生した原因にはいろいろ考えられる。1980年代にむかって経済の急成長下で、ゆとりをとりもどした人々が、茶を通じて得られる心の安寧をまたもとめたものともいえる[陸堯 2001: 7-8]。台湾・香港の飲茶事情についてくわしいジャーナリストの平野久美子も、茶芸を中国の伝統文化に触れるためのものと位置づけている⁽¹⁾。また、茶芸は日本の茶道の影響を受けたものとされ、谷本陽蔵によると、茶芸館は日本統治時代の和風建築の影響を受けている店が多いという⁽²⁾。

ところで、最初の茶芸館は1977年に台湾の台北・高雄で開設されたと記録にある[中国茶葉股份有限公司 2001: 271]。同時期、台湾や香港では日本の茶道の影響を受けて中国茶芸が誕生し、中国全土でも1980年代から、一大中国文化ブームがまき興った[余 1999: 169-170]。背景には、1980年代から中国全体の茶葉の輸出量が上昇したことも一因であろう(図 27)。1982年に上海の復旦大学で中国文化史研究会が開かれたのを契機に、鄭州・北京・深圳・杭州など各地で中国文化史や中国と西洋の文化比較、中国伝統文化の現代化などに関する会議がつづき、マスコミも大きくこれらを取り上げ、改革開放時代の大衆の文化ブームも追い風となり、知識人は茶に多くの関心を寄せ始めた⁽³⁾。1983年ごろ、現代の「茶聖」とされる呉覺農(1897-1989、浙江大学農学部茶学科の創設者の一人)が代表となって、学術文化・教育・衛生・科学研究・茶葉貿易などの関係者が参加して学術文化交流を展開し、茶葉経済の振興を復興して⁽⁴⁾、伝統的な茶文化と茶葉貿易を結び付けようと考え

た[余 1999: 170]。浙江が中心となった理由のひとつに、同省が中国の茶葉貿易全体に重要なはたらきをしているとことであろう。(図 28)によると、中国全土の茶葉の輸出量の中で浙江省が占める割合が、1979 年前後から上昇しており、それは表 3 の国家別国外外国輸出量においても、同様であった。中国政府は 1984 年に自由貿易を開始し、高級茶の販売ルート拡大のために茶文化推進策を推し進め、その一環として、1987 年に台湾の茶芸関係者を招き、大陸にはじめて茶芸が紹介されたという[齊藤 1998: 79-86]。

1980 年代に茶文化研究が進むにつれて、茶は自然科学・人文科学両方面から研究されるようになり、茶文化は社会の中で一つのブームとして定着し、茶館は各階層の人々が茶文化に直接接触する場として、一般人の生活にも不可欠のものとなった。1989 年に北京で中国茶文化展示週間、1990 年に杭州で第 1 回国際茶文化節が実施され、国内外の人々の関心を集めた[孔 1993: 169-171]。茶文化ブームを発展させ、対外交流をさらに活発化させるために、1990 年代は茶文化団体の設立が盛んであった⁵⁾。1990 年、茶聖陸羽が『茶経』を執筆した湖北省湖州では陸羽研究会が発足し、同年北京においても茶葉茶人連合会の成立[余 1999: 172-173]、さらに 1990 年 10 月に浙江国際茶文化研討会常設委員会が、浙江省対外文化交流協会・中国茶葉学会・浙江省茶葉協会などの協力により設立をみた[孔 1993: 169-171]。茶文化ブームの中で、茶に関する専門書・書籍・ビデオなども 1990 年代に続々と出版された。これらは文学・歴史・民俗・文化・化学と広範囲な角度から茶を取り上げており、茶学の専門家のみならず、他の学問領域の学者も参画しての最新の研究成果をあげた[余 1999: 174]。1991 年以後、江西省社会科学院から茶文化の専門誌「農業考古《中国茶文化》専号」が毎年 2 回刊行され、茶文化を教授する研究機構も、1950 年代に設立された中国農業科学院茶葉研究所、浙江大学農学部茶学系などに加え、南昌女子職業技術学校なども名乗りをあげた[孔 1993: 169-171]。

中国大陸における最初の茶芸館は、香港の陳国義・陳国章兄弟により、1993 年 7 月に広州に開設された茶芸楽園とされるが、1997 年以降はさらに増加の一途をたどっている[蔡泉宝 2000: 112]。北京における茶館・茶芸館の数は、1997 年は 70 軒であったが増加をつづけ、2001 年末には 310 軒[王亜雷 2002: 私信]、2001 年 5 月 18 日現在には、北京だけでも 302 軒の茶館を数え、前年の同時期に比べて約 40%増加した[陸堯 2001: 7-8]。

茶芸館の普及と生活水準の上昇は機を一にしている。例えば茶の消費を一例とすると、北京市においてその消費が急増したのは 1990 年から 1995 年、1995 年から 1999 年で[北京市統計局 2001: 327]、1997 年以降の茶芸館も普及と呼応している。経済の進んだ地域に高消費の茶芸館が多いとの指摘もあり[齊藤 1998: 81]、北京の生活水準の上昇が茶芸館の急増を招いたものと思われる。

茶芸運動の推進者達は、茶芸館は従来の茶館と異なり、経営者は大衆に茶文化を普及させるべきであると主張している[陳文華 1999: 前言]。茶芸振興運動は東アジア全体を巻き込んだ文化運動というが、背景には各国の生活水準の上昇がその大きな要因といえよう⁶⁾。

杭州市の著名茶芸師たちが、茶芸の“復興”とみなしているか、“創造”とされているかについては、6-3 で後述したい。

4-3 現代中国の茶館・茶芸館の類型

次に中国における茶館の2つの類型を、北京を例に取り上げて検証する。茶館の中には、例えば北京の老舎茶館のような劇場タイプの茶館と、北京の五福茶芸館のような茶芸館タイプの2種類がみられ、それぞれ目的と客層が異なる。

① 茶館タイプ——事例「老舎茶館」

茶館タイプの場合、茶を楽しみながら相声(漫才)、京劇、雑技などを楽しむのが主体である。劇場としての性格を持つ茶館で、観客はテーブルを囲んで、点心を食べながら、相客と語らいつつ京劇や相声(中国の漫才のようなもの)を楽しみ、茶を飲み、生活から遊離した観光客が中心となっているとの特徴がある。北京の前門にある「老舎茶館」は、有名な老舎の戯曲『茶館』から名づけられた茶館である。戯曲『老舎茶館』は、清朝末期から主に中華民国の茶館を舞台に当時の世相を描いた作品であるが、現在の北京の「老舎茶館」は、上述のような旧式茶館とは大きく異なる。現在北京の中心地前門に存在する「老舎茶館」³²は、1988年に創立され、元来が露天の茶売りである大碗茶から、香港の資本の援助を受けて発展したものである[斉藤 1998: 79-86]。「老舎茶館」は、夕方から夜にかけて開場され、ほとんどの客は途中入場・退場はなく⁽¹⁾、計3時間ほどは茶館の中で時を過ごす。

現在の「老舎茶館」については、在中日本人の間では否定的な見解が強い。値段が高いことや、生活から遊離して観光客が中心となっているからだという。これらの意見を一概に否定することはできない。たしかに、1回茶館に入るのに茶と点心と観劇のみで最低一人80円を要するのは、バスが1円から3円で乗ることが出来る中国では決して安い値段ではないし、また、値段が高いために、たまに訪れる観光客中心になる傾向も否定できない³³。エキゾチシズムの表れ[伊藤 1999: 20-26]とか、老舎茶館は市民生活とはかけ離れた観光名所であるとの意見が多い[手代木 1996: 116-117]。高額な料金と外国人観光客ばかりの客層から、「老舎茶館」を喫茶店の一種ととらえると、それも否定できない。しかし、現在の「老舎茶館」をむしろ劇場の一種として、中国の伝統文化の宣伝塔のひとつとみな

³² 老舎茶館の演目は、京劇の『霸王別姫』・『楊貴妃酒酔い』・『三岔口』・『玉腕輪を拾う』・『鉄弓縁』・『白蛇伝』などであり、他にも太鼓・雑技・口真似・自転車曲乗り・手品などの芸能が上演されている。

³³ 茶芸館は、茶は廉価品：紅茶15円から、最高品：高級中国茶の300円であり、これにサービス料20円が加算される。料理、酒は一切メニューになく、菓子はワゴンサービスでの種類は山植片(サンザシのドライフルーツ)、杏仁(アンズドライフルーツ)、什錦豆(にしき豆)、日本豆(大豆)、香蕉(干しバナナ)などなど16種の一皿10円から20円の菓子がワゴンサービスで運ばれる。茶館を一回利用するのに最低金額として90円かかることになる。

すとするならば、有名人も多々訪問する老舎茶館の使命は、中国文化を外国人に紹介することではなかろうか。布目は老舎茶館を訪問した際、店員と闘茶遊びに興じた様子を語っているが[布目 2000: 212-213]、中国文化の普及活動も今後老舎茶館に期待される役割ではないだろうか。

② 茶芸館タイプ——事例「五福茶芸館」

茶芸館タイプの場合は、客は小姐が目の前で茶芸によって茶を淹れるのを見ながら、商談したりするのが中心である。茶芸とは、序論でも触れたが、例えば工夫茶器などで中国茶を淹れて飲ませるやり方で、茶芸館は茶芸を行なって中国茶を入れて飲ませる中国風の洗練された喫茶店ともいえる。前述したように茶芸は 1970 年代末期に台湾で日本茶道の影響をうけて誕生し、1987 年に中国大陸に紹介されたとされるが、茶芸館は茶芸宣伝の場という重要な機能を帯びている。

ここで例に挙げた北京の「五福茶芸館」は、1994 年に創立され、1999 年には北京に 11 のチェーン店を持ち、規模といい文化風味といい、おしも押されぬ地位をきずきあげた。

「五福茶芸館」は茶芸の普及・茶の国際活動の推進・茶文化書籍の出版なども行い、社会に与えた影響が大きい。こうした「五福茶芸館」の先導のもとに、北京の茶芸館はついにブームとなり、1999 年はすでに北京の茶芸館は 100 店以上を数えるに至っている。「五福茶芸館学院南路店」は、北京の海淀区、北京師範大学のすぐ南にあるが、周囲は知識人の多くすむ都心の高級住宅街で、80-300 元の高価な茶代にもかかわらず、客足が途絶えることはない。「茶芸館の客は 30 才台から 40 才台の者が最も多く、商談に利用」との指摘もあるが、これらの茶芸館は高価な茶代から経済力の誇示、一種のステータスシンボルとすらなっているように思われる⁽²⁾。

現在「五福茶芸館」は、店内の展示、自由に閲覧可能な書籍、雑誌、店員の説明など、文字通り「知福・幸福・享福・惜福・造福」の五福を文字通り体現し、中国茶文化の広報活動の先端をになっているように推測された。

第5章 中国茶葉貿易の傾向

5-1 中国の茶葉貿易

中国全体の茶葉のアメリカ・日本向けの輸出は、1975年には両国あわせて2000t前後であったのが、20年後の1995年には、4万t近くに達している。中国茶葉の輸出量は、1975年にはアメリカ向けは1552.37tの輸出量に対し、同年の日本は約364.46tだった。その10年後にの1985年にはアメリカ向けの輸出量は、1万2562.51tに対して、日本は6549.37tであったのが、そのまた10年後の1995年には、アメリカ向けは1万9308t、同年の日本向けは1万9658tとなり、アメリカ向け輸出量を凌駕している。1975年にはアメリカの約1/4であった中国茶葉の日本向け輸出量が、20年を経過した1995年には、じつに日本向けの輸出量は約54倍となっているのだ。おなじくアメリカでも20年の間に約12倍となっている(図27)。アメリカにおいても、茶も一定量摂取されている(図35)。

なお1980年に中国全体の茶葉輸出量は10万tをこえ、以後1981年の9万t台をのぞくと、1997年までほぼ20万tとなっている[中国茶葉進出公司1997: 2-6]。浙江省の茶文化^①にとっても1979年は時代の転換期であったと推測されている。

また図33の中国全土の日本向けの輸出量を、例えば表4の朝鮮人民共和国向けの輸出量と比較してみると、日本への茶の輸出量の顕著な増加が認められる。とりわけ日本でも烏龍茶がブームとなり、やがて生活習慣の中に定着した1979年以降の輸出の伸びが著しい(図29・30)。中国の茶文化は、古来茶葉貿易と密接な関連性をもって発展しており、日本と中国の密接な茶葉貿易を通して、日中の茶文化の相互影響がうかがわれる。

5-2 浙江省の茶葉貿易

1995年度のデータではあるが、中国全体の茶葉輸出に、浙江省の占める割合は中国全体の約1/3を占めて、輸出量3万4242tは全国の省の中で他を圧倒している(図26)。この傾向は現在でも続いている。

次に、浙江省の茶葉輸出量の全国輸出量に占める割合の変遷(図28)をみてみよう。統計記録がはじまった1979年前後は、わずか0.1%前後にしかすぎなかったのに、1980年代後半には全体量の20%前後を占め、1993年には約1/3近くにまで増加している。浙江省の茶文化が、中国茶文化全体に占める影響の強さが推測できるだろう。1979年に中国の経済政策が転換して以後、浙江省の茶葉の輸出が奨励され、とりわけ1982年以後は中国全国・浙江省ともに質量ともに揃った銘茶が求められた[阮2003: (1)112]。

また表5の浙江省に設立された日中合同資本企業の1986年から1997年にかけての輸出量は、連続して上昇傾向にあるが、とくに1990年代からののびがめざましく、1997年には2105tにも達している。これは1986年の203tにくらべて約10倍となっている。

1990年代の後半から、浙江省の中国茶芸と日本茶道との交流が活発になったが、専門家同士の日中相互訪問にはじまり、中国茶芸も日本茶道、とりわけ裏千家の技法を積極的に取り入れ、浙江省内の中国茶館のインテリアにも日本茶道からの影響が色濃く感じられてくる。この背景には、図33と表5にみられるような、日中茶葉貿易の相互関連性の影響や存在がみられる。さらに詳細にみると、浙江省からアメリカ合衆国・日本への茶葉の輸出を、1980年から1993年にかけてのそれと比較すると、1980年にはアメリカ向けは3t、日本向けは5tと微量であったが、1993年にはアメリカ向けは4224t、日本向けは3243tと、じつに約1000倍もの伸びを示すようになっている(図34)。ちなみに浙江省は中国全体のアメリカ向けの約1/4・1/5、日本向けの約1/5を占めている。

第6章 現在の杭州市の茶文化

6-1 杭州市における茶に関連する諸機関

浙江省杭州市は、中国の茶葉の都[陳浩行 1999: 5]と称されていることから分かるように、中国茶の生産・研究・流通の中心地のひとつであり、市内には浙江大学農学部茶学系や中国茶葉博物館、中国茶葉研究所といった中国茶関係の国家機関が集中し、互いに緊密な関係を保ちながら、活動している⁽¹⁾。

浙江大学農学部茶学系は、歴史は第2次世界大戦以前にまでさかのぼるが、新中国の成立以後1952年10月に浙江農業大学茶学部として設立され、1998年に浙江大学との合併に伴って浙江大学農学部茶学系と改名された。唐代の陸羽とも並び称される20世紀の浙江の茶聖呉覺農など、中国茶業界に幾多の人材を輩出した伝統ある学科であり、浙江大学農学部キャンパス内に茶学楼(専門の校舎)で、茶に関する研究・講義などがおこなわれ、中国全体の茶文化向上に深く貢献している。

日本では、茶の研究は農学部や理学部などで研究されている自然科学方面の視点からのアプローチと、歴史学・民俗学・文化人類学などの研究者による人文・社会科学の手法による働きかけとに二分される。しかし、中国においては、茶を包括的に捉える学問体系が成立しており、自然科学分野の研究者もまた茶文化・茶の歴史・茶芸などにも造詣が深い。現在の中国で「茶学」の専攻が置かれているのは、浙江大学農学部の他に、安徽農業大学などがある。それぞれ銘茶の産地に設けられたこれらの機関は、茶文化の中心地のひとつとして互いに競い合っている。

中国農業科学院茶業研究所もまた1950年代に設立された、中国における総合的茶業研究センターのひとつであり、茶の栽培用地や茶関連実験施設、茶関係書籍の図書館などが設置されており、研究のみならず後述する茶芸師の養成活動などが活発である。

一方、その他中国茶葉博物館は、杭州の西郊銘茶西湖竜井茶の産地の双峰に、1991年に中国政府によってつくられた国家規模の茶専門の博物館である[施奠東 1999: 見開き]。茶畑・博物館展示室・資料室・日本茶道の茶室などを擁し、広く中国茶の展示・研究・交流活動をおこなっている。博物館内には、茶芸師を養成する専門学校(浙江華韻食業技術学校)や、中国国際茶文化研究会の事務所が設置されており、一般の博物館との差異は、展示・販売にとどまらず、茶に関する研究・教育活動に力を注いでいる点にある(図19)。

さらに中国国際茶文化研究会は、国際的な茶文化研究の学会で、全国的な民間の交流団体でありながら、国家農業部の管轄下にあり、国家民政部にも登録されている。幹部に浙江省政治協商会議の主席などを置き、政府機関との連携もまた密である。1982年に茶文化宣伝のための国営茶館「茶人之家」が設立され、1990年に杭州で第1回国際茶文化研究会が開催されたとき、中国、韓国、日本など内外の茶学・茶文化・茶業関係者からなされた提言に基づき、1993年に正式に設立された[余 1999: 168-170]。会員の多くは海外会員

である。

浙江華韵職業技術学校は、中国茶葉博物館内に置かれた職業訓練校である。浙江省の労働社会保障庁の認可を受けたもので、同省の民政庁に登録されている。中国国際茶文化研究会・中国茶葉博物館・浙江省国際茶業商会の協力のもとに、2000年7月2日に創設されたもので、むろんその目的は、茶文化を広め、茶業の繁栄を促進し、茶関係の職に従事する要員の資質を向上させ、さらに茶文化に貢献する人材を育成することにある。現在同職業技術学校は、名誉校長に全国的に有名な茶文化の大家をいただき、理事長に中国国際茶文化研究会会長、副理事長に浙江省国際茶業商会会長、理事に中国茶葉博物館館長、校長に浙江大学農学部茶学系教授、常務副校長に高級政治工作員、副校長に中国農業科学院茶葉研究所研究員、同じく副校長に茶博覧誌の編集長、そして浙江省の茶学関係の各団体の幹部らが名を連ねている。

6-2 杭州市における評茶師培訓班活動

評茶とは、茶の品種・品質を鑑別することをさす語で、いわゆるテイスティングのことである。現代の評茶は、起源は宋代の時代の闘茶であるとされ、その様子は前述の絵画「闘茶図」から見てとることができる(図 11・図 12)。評茶が、現在のように科学的色彩をおびた形式になったのは、20 世紀以後のことである。中国各地に農業学校・農業大学が開講し、系統的な学問「茶学」が成立したのち、評茶は茶学の重要な一部分となり、各大学の茶学科の必須科目となっており、現在では「評茶員」制度さえもある。

評茶員とは、評茶を行う技能を持つ者を認定した中華人民共和国の国家資格であり、高級・中級・初級の 3 段階に分かれる。本節では、杭州市の浙江大学農学部茶学系³⁴で実施されていた評茶員の培訓班(講習会・後述)について、著者の現地における 2003 年 3 月のフィールドワークをもとに論じたいとおもう。

評茶は、次の段階を経て行われる。

- ① 茶の葉が乾燥している状態を観察する。茶の葉を篩のようなものに入れてゆらし、それを白い木でできた枠の中に入れて広げる。この作業の目的は、茶葉が乾燥した状態での色・形・香気を調べることにある。
- ② 茶を規定の時間・容量で淹れるが、それには茶用の白い専門容器を使用する。
- ③ 茶を口に含み味わう。口に含んだ後、ワインなどのテイスティング同様、茶はバケツに捨てる。バケツに口の中の茶水を捨てるのは、評茶の際に何杯も飲むので茶に酔う状態になり、精密な鑑定ができなくなるのを防ぐためである。
- ④ 淹れた後の茶の葉の状態を、ぬれた茶の葉の開き方、形、大きさなどに注目して観察する。

以上の過程をへた結果は、規定の用紙に記し、他の茶葉と比較する。これらの作業によって評茶を行う目的は、茶葉の品質の鑑定とそれに伴う等級づけである。表茶を行う際には、同じ種類の茶^④を比較することが多い。例えば、中国茶の中には、正山包種なる紅茶があるが(日本の日常生活の中で飲まれている紅茶と、味や香りは似ているが、やや薄い感

³⁴浙江大学農学部茶学系は、審評室(品評専門の実験室)を有している。そこは採光条件がよく、品評台と机、水道、ガス湯沸し器などが完備され、中国全国でもめぐまれた実験条件を備えている。同様の機関は、他には安徽農業大学など数少ないとのことである。審評に当たっては、浙江大学では「浙江農業大学(浙江大学の旧称)茶葉系(茶学系の旧称)茶葉審評報告単」という、審評結果を記録するための専門の用紙を発行していた。それは、1 行目に茶類・品名・クラス名・日付・審評した人の名前を記述し、下は表になっている。縦軸は等級・評価の言葉・項目を記述し、横軸は茶葉の外形・香気・淹れた茶の色・味・淹れた後の茶葉の状態を記述するように工夫されている。

じを受けた)、それを 6 種類にランキングするなどである。杭州市で販売されている茶葉のなかで、圧倒的に多いのは緑茶であり(表 9)、やはり緑茶のティスティングに力点を置いていた。

西湖竜井茶を例にとると、茶のランキングは、表 10 で示したように 1953 年の時点で 11 のグレードがあったが、下位のものには現実的には評茶の場で登場することは少なかった。このグレードは上位から 1 級(100-96 点)、2 級(95-91 点)、3 級(90-86 点)、4 級(85-81 点)、5 級(80-76 点)、6 級(75-71 点)、7 級(70-66 点)、8 級(65-62 点)、9 級(61-58 点)、10 級(57-54 点)、11 級(53-50 点)であった。1957 年には 1954 年の 10 級をさらに各々 3 つに分けて 30 級もの級をつくった。1958 年には特等を増設して合計 31 級にした。しかしながら、以上述べたような当初の基準にもかかわらず、1966 年から 1976 年の文化大革命によって曖昧となり茶の品質も低下し、1979 年には今までの 30 級ものランキングをあらためた。そして 1980 年代後期、市場の要請によって、「西湖竜井茶ブランド」が確立した[阮 2003a: (2)39]。

西湖竜井茶以外の浙江省の他の緑茶^②も同じような状況であって、1951 に 6 級に評茶の基準をつくり、1952 年には 5 通りのグレードにした。表 11 で 1953 年には 1 級 92 点以上、2 級 83 点以上、3 級 75 点以上、4 級 65 点以上、5 級 55 点以上と点数を定めた。1954 年にはグレードをさらに 16 通りに細かくし、1958 年にやはり特等を増設した。だが西湖竜井茶と同じく、文化大革命の影響によって、1972 年には茶の級別も簡略化され、生産量も減っていった。1983 年には中断していた生産を本格的に再開し、6 級 12 等の新たなランキングを形成し、ブランド名を「千島玉葉」などとし、それまで数多くあった茶のブランドをこの名前に統一した。以後、無名の茶のブランドは消滅する傾向にある[阮 2003a: (2)39]。

品質の測定方法も、やはり 1950 年代初期の当初の基準が文化大革命で低迷した後に、1980 年代初期に復興するということになった。1950 年に茶の品質の分別は、湯で“湿らせた”ときに、とくに匂いや味、淹れた茶の色、杯の底の茶葉をみるなどの基準がつけられたが、この時点ではまだ統一基準に乏しく、色で 10%、匂いで 25%、淹れた茶の色で 20%、味で 20%、杯の底の茶葉 20%で採点して、中程度の茶葉を「1 点満点」、最高品質は 1.5 点、最低品質は 0.8 点と定めたのみであった。1951 年には最低品質 0.7 点まで下げた。さらに 1952 年には、それまでの 1 点満点から 100 点満点に改め、色 5 点、匂い 25 点、淹れた茶の色 20 点、味 25 点の合計 100 点で計算し、最低点は 50 点で、中級品は 60 点とされた。

表 12 に示したように、1953 年にはさらに茶の種類によって標準をかえ、紅茶は匂いが 30 点、味が 30 点、淹れた茶の色が 10 点、杯の底の茶葉が 30 点の合計 100 点となった。一方西湖竜井茶などブランド品ではない緑茶の一般の茶葉については、匂いが 30 点、味が 30 点、淹れた茶の色が 20 点、杯の底の茶葉が 20 点の合計 100 点と定めた。これに対し、西湖竜井茶をふくむブランドの緑茶の採点基準は、匂い 15 点、味が 10 点、淹れた茶

の色が 15 点、杯の底の茶葉 10 点の合計 50 点満点であった。1954 年には、紅茶やブランドではない緑茶の品茶方法をあらため、匂いと杯の底の茶葉でおのおの 50% の評点をつけ、味や茶の色は参考程度と決められた。

文革の中断を経て、1980 年には、茶葉の品質以外に商品包装をも重視するようになった。1983 年には、匂いや味、淹れた茶の色の優劣と茶の品質の関連性を、より綿密に定めるようになった。同年、さらに変質して商品とはいえない茶葉の煙くささや焦げ臭さ、酸っぱさなどの分類も細かく制定するなど、品質管理がより厳重に実施されるに至った[阮 2003a: (2)59]。

評茶員の培訓班は、杭州市内では、著者が留学していた浙江大学農学部茶学系、農業科学研究所、中国茶葉博物館などで行われている。ただの茶芸師の培訓班ほど頻繁に実施されてはならず、2002 年から 2003 年にかけての約 1 年間は、著者がフィールドワークを行った 2003 年 3 月の初級・中級・高級合同の培訓班一期だけであり、そこで著者は中級評茶師の国家資格を取得することができた。評茶師の培訓班は、他にも中国農業科学院において 1 年に 1 回程度の頻度で行われている。

浙江大学農学部茶学系全体の教員は全体で数十名であり、特徴としては、ほとんどが浙江大学出身であり、しかもその大部分が 1960 年代に浙江省で生まれている。興味深いことに、女性教員の比率は他学科よりも多く、評茶員の培訓班においても、例えば同じ傾向が見られた。培訓班に限らず、浙江大学農学部茶学系の教員全体の傾向として、1930 年代後半あるいは 1950 年後半から 1960 年代半ば生まれであり、浙江省・江蘇省・広西省などの中国南部の出身であった。こうした世代的な偏差は、1966 年から 1977 まで 10 年間続いた文化大革命により高等教育を受ける機会が少なかった世代は、大学で職を得るのが困難であったためとおもわれる。

茶芸師培訓班の受講生は、通常はほとんどが女性であったが、著者が参加した 2003 年 3 月の中級・高級評茶師の培訓班は、6 割方が男性であり、年齢層も 20-50 歳代と幅広く分布していた。その多くが、茶葉生産農家の主人や茶葉販売会社の営業担当、商社マンなどで、外国人は浙江大学農学部茶学系に留学中の韓国人と日本人だけであった。

講義と試験をふくめて期間は 9 日間であり、高級評茶師は、10 数年以上の実務経験者のみが受験をゆるされた。講義の内容は、審評の基本知識、茶類の弁別、茶葉の生産技術と品質への影響、品種と茶葉の品質への影響、茶葉の品質成分の基本的化学知識、西湖大仏越郷竜井茶の審評、茶葉の精密加工技術と品質への影響、紅茶と珠茶³⁵の審評、有銘茶の加工技術と品質への影響、有名緑茶の審評方法と用語の応用、審評方法と審評結果への影響、茶葉の標準的種類製作保管使用法、栽培と環境条件の茶葉の品質に与える影響、烏龍茶の品質の審評と比較と理論の復習、審評実技の復習、そして審評試験と理論試験であっ

³⁵ 中国緑茶の一種で、外見が珠のようにまるくなっている。

た。受講生の多くが実務経験者であったためか、講義内容は比較的レベルが高く、茶のテイストングの実際を細密に研修し、厳正に試験がおこなわれていた。

審評は、例えば西湖竜井茶と大仏竜井茶のように、同じ緑茶の違う銘柄を区別するよりも、同一品種内での等級付けが主な目的であった。実際に厳密な品茶を行える環境条件をもった機関は、中国国内でもごく少数であるとされている。

茶は、品質のよしあしによって価格が顕著に上下する作物である。例えば杭州市の銘茶西湖竜井茶は、廉価のものは100gで10元³⁶であるが、高価なものは900元もする。それゆえ後述する評茶の結果は、茶の生産農家や仲買人、売買会社の職員などにとっては、決定的に重要な意味を有する。さらに、茶館勤務を志すものにとっても、茶の品質を査定できる力を養い、国家資格をもつことはたいへん重要な意味を持つ。

茶が品質によっていかに値段が左右されるかについては、例えば杭州市の竜井茶の間屋価格(表7)と小売価格(表8)をみてみれば、一目瞭然である。表7では、1979年特級西湖竜井茶が1979年には1kgあたり48元であるのに対し、3級では18元あまりと半分以下である。改革開放政策のもと、市場経済が進行するに従って、品質による値段の差異は広まる一方であった。たとえば1990年には、特級の西湖竜井茶が174元であったのに対し、3級は54元あまりと3倍以上の値段の開きがあった。また、間屋価格と小売価格を比較してみると、1979年には特級が57元(市場価格より10元上乘せ)し、3級が21元あまり(3元の上乗せ)だったのに対し、1990年には特級の小売価格が200元(26元の上乗せ)、3級品は62元(8元の上乗せ)にとどまっている。この表にあるのはごくごく標準的茶葉で、市場経済がさらに進行する1990年代後半以降は、1kg700元前後の非常に高額な茶葉も市場で頻繁に見かけるようになった。

³⁶前述したように、2003年時点では10元は150円に相当する。ちなみに、杭州市ではバスの乗車券が2元(30円)、大学生のアルバイトの家庭教師が1時間20元(600円)であった。

6-3 杭州市における茶芸師培訓班活動

中国で茶芸師になるのは、茶館やレストランで実務経験をかさねた後に、大学や他の団体が主催する培訓班に参加し、国家資格を得るのが一般的である。培訓班とは、ある団体が一定の期間の講習会であるが、その後、参加者に国家試験を実施し、国家資格を授与する。それは茶だけではなく、料理や日本の(煎)茶道など多岐にわたり、中国茶に関する培訓班には、茶芸や評茶(ティスティング)などがある。著者が参加した培訓班においては、受講生は自習を含む計 120 時間の講習会を受けたのち国家試験に臨み、合格者に国家資格が付与され、それぞれ生年月日と理論知識考核(理論試験)、操作技能考核(実技試験)の点数が明記されたパスポート型の証書を授与された。講習期間自体は通常 10 日から 2 週間前後で、講習以外特別な活動は行われていないようである。著者の場合を例にあげると、2003 年 2 月 10 日以降、培訓班の受講生は「茶館常用外国語」「茶経古代茶書の講読」「古代茶論講読」「関係法規道徳」などの科目の自習を要求される。同時期、浙江華韻職業技術学校においては、特別な講義などは行っていなかった。自習のあと、3 月 2 日から 3 月 11 日まで集中培訓と国家試験が行われた。2 月 10 日以降の自主学習の科目は、実務の経験のある大多数の中国人受講生にとっては、いずれも学習済みであり、それゆえ自主学習は形式的なものであった。

1990 年代半ばまで、茶芸師資格がないものでも、茶芸館などにおいて客の目の前で茶芸を披露する「小姐」(原義は「若い女性」)や茶芸館の経営者「老板」になることができた。しかし 2000 年以降、「小姐」や「老板」になる場合、一般的傾向として茶芸師の資格を持つことが望ましいとされるようになった。事実、中国の江西省社会科学院が年に 1 回発行している茶文化の専門誌「農業考古《中国茶文化》専号」には、茶芸館の小姐の氏名・性別・顔写真・携帯電話番号とともに、茶芸師資格の発行番号までが明記されている。こうした傾向がより強化されていけば、いずれ茶芸師の資格取得が、茶芸館で働くための不可欠な条件に必要なことになると思われる⁽¹⁾。

茶芸師培訓班設置の経緯について、浙江省杭州市の中国茶葉博物館を例にとって説明しておこう。この博物館では、前述した華韻職業技術専門学校の設立以前、すなわち 1996 年からすでに、各地茶芸館の要請に応じて、茶芸館の従業員を再教育するための培訓班を開催している。1997 年 11 月 14 日、浙江省茶関連の博物館や研究・教育機関は、同省労働社会保障庁に茶芸師を正式の職業資格として申請した。そして 1999 年 5 月、それが認められ、茶芸師は中華人民共和国の正式職業のひとつとして認定されるようになる。2002 年現在、浙江以外の中国各地でも培訓班活動は行われている。例えば 2001 年 6 月には江西省社会科学院が、16 名の高級茶芸師を認定したが、こうして中国で初めての高級茶芸師が誕生することになった。また山東省茶文化協会でも茶芸師培訓班活動を行っており、北京の五福茶芸館、上海の天天旺茶宴会館、重慶の江風茶坊など、飲茶の風習が盛んな大都

市の有名茶芸館でも、独自の培训班が設置されはじめている[中国国際茶文化研究会 2002: 6-7]。

浙江華韻職業技術学校は、2000年の7月と8月、2期に分けて茶芸師の培训班を実施し、北京・山東・広東・湘南・遼寧・江蘇省など全国各地からの参加者に加え、日本や韓国、ドイツといった外国からの参加者合計 80 余名がこれを受講し、2000年9月2日に杭州で初めて 78 人の茶芸師が誕生した。茶芸師培训班の受講資格に一定の学歴が必要なため、「茶を淹れるのに学歴が必要か？」との国内批判もあったと聞く。だが、華韻職業技術専門学校は続けて毎年培训班活動を行い、2002年6月までを例にとると、茶芸館従業員・茶芸師・高級茶芸師・日本煎茶道など計 11 回もの培训班が開講され、45 人の高級茶芸師、227 人の茶芸師、10 人の初級茶芸師を認定するに至っている。成立後まだ日が浅いとはいえ、同校は中国政府と地方公共機関の篤い支持を受けている[江 2002: 11-12]。ちなみに著者が受講した 2003 年 3 月期の高級茶芸師培训班は 44 名であった。

浙江華韻職業技術学校の教授陣は、大学・専門学校の教授・助教授、中国農業科学院茶業研究所の研究員(教授待遇)、副研究員(助教授待遇)、茶葉の店主や茶芸館の幹部技術者などから構成されている。2003年3月を例にとると、教授陣は全員で 19 人。うち女性は 4 人、西安出身の 1 人をのぞき、他はほとんどが浙江省出身で、杭州の茶文化を代表する著名人ばかりであった。教授陣は専門領域から茶学派と茶芸派に分けることができる。茶学派は 19 人中 14 人、人文科学・自然科学の立場から茶を研究する研究者が中心で浙江大学農学部茶学系出身の男性がほとんどであり、1960 年代生まれと 1930 年代生まれが半々であった。茶芸派は 19 人中 5 人で、茶芸や評茶(テイスティング)を教授し、女性がほとんどあり、3 人が浙江大学出身、ほとんどが 1960 年代生まれであった。教授陣は、1930 年代生と 1960 年代生に集中している。中間の世代は、文化大革命の影響で、高等教育を受けられなかった教員が多い。

高級茶芸師培训班の受講資格はが大卒・専門学校卒以上だが、高卒の場合、茶芸を行う茶芸館やホテルなどの経営陣であるか、初級・中級の茶芸師資格を取得後 3 年以上経過していることが要求された。

中級茶芸師の受講生は 20 代から 30 代の女性が多く、彼女たちのほとんどは浙江省出身で茶芸館の小姐でもあった。これに対し、高級茶芸師の多くは、40 代から 50 代で茶芸館の老板の割合がふえ、出身地域も浙江にとどまらず、北京や上海など全国各地から集まっていた、男性の受講生も国営茶芸館湖畔居の若い茶芸師など、優秀な人材ぞろいであった。また、高級茶芸師培训班の受講者の中には、インテリアデザイナーなど、直接中国茶と関係ない職に従事している女性(27 歳)などもいたが、ほとんどは茶芸館の小姐・老板であったため、授業はむしろ復習ないし再教育を内容としていた。これら受講生たちの主な目的は、資格の取得や、全国の茶館関係者同士の交流などであった。

他地域の受講生は、仕事の合間をぬって杭州で培训班に参加しており、国家試験が修了

するやいなや杭州を離れてしまう者がほとんどであった。これに対し、杭州市内の茶館の老板・小姐などの中には、他地域の受講生や講習会の教授陣と名刺の交換・写真撮影などを行い、自分の茶館の宣伝をかねて招待し、茶芸を披露して茶をふるまう者もいた。国家試験後の食事会が、相互交流の絶好の場であった。地元のテレビ局もしばしばこうした培訓班を取材し、「杭州の茶芸師」などのテーマで放送する。これは、杭州の観光資源のひとつである、同地の茶文化の宣伝をねらったものといえる。

講義の内容は、茶文化概論、茶葉の加工、茶道の類型研修、『茶経』と古代茶書講読、茶具の配合と鑑賞、飲茶方法の規範、茶芸実技、茶葉品質の評茶(ティスティング)、茶館の環境芸術、各国各地方飲茶習俗紹介、茶館経営管理、茶芸技能訓練、茶の絵画と詩、茶館常用外国語、茶館関係法と道徳などであり、最後に筆記試験や実技試験、小論文提出などの審査を経て国家資格を授与された。

筆記試験は講義内容に基づいて自然科学と人文科学の広範囲から、茶に関する基本的な知識を問うもので、例えば茶の製造法や品種、茶の淹れ方、茶書、中国茶芸と日本茶道の基本理念の違い、さらに特定の茶葉を淹れるときの注意点や茶器の配膳など広範にわたる。とくに高級茶芸師用の試験は、日本語力も問われるがこれは、中国茶文化における日本茶道の重要性、中国と日本の茶文化の盛んな交流、そして茶芸館に日本人観光客が多いことなどに呼応するものである。筆記試験と同時に、小論文レポートの提出も要求された。ここでは用いる茶葉の種類や日時、場所、茶具と茶器、茶芸全体のテーマの説明、茶芸の順番、そして結論など、衣装、化粧、背景音楽などに至るまで、茶芸師の独自性が要求された。茶芸には、ただ茶を淹れるためだけではなく、演劇的要素も要求されることがうかがわれる。

中国茶芸は、現状においては、例えば日本茶道ほどに細かい規定があるわけではなく、流派も浙江・福建・台湾・香港と各地区ごとに異なるが、日本のように裏千家・表千家・武者小路千家といった家元制度が確立しているわけではない。著者が学んだ浙江の茶芸も例えば浙江大学農学部・中国茶葉博物館などによって細かい差異があるが、それが何派と分別されているわけではない。むしろ著名な茶芸師(多くは容姿端麗な女性である)が、茶芸は中国に古代からあったものが、復興したととらえたうえで、おのおの独自の茶芸を開発しつつある。

しかしながら、例えばお辞儀の仕方ひとつとってみても、男性の立ち姿のお辞儀が9通り、椅子に坐ったお辞儀が4通り、座布団などにすわってのお辞儀が8通り、女性の歩き方が4通り、立ってのお辞儀が6通り、椅子に座ってのお辞儀が4通り、座布団などにすわってのお辞儀が8通りと詳細な規定が確立しつつある。茶巾(茶器などをふくのに用いるふきん)などでも長方形のたたみかたと正方形のたたみ方とがあり、それを用いて茶碗を用いるやり方や盆のふき方、茶碗の湯のこぼし方、茶壺(急須にあたる)から茶碗への茶の淹れ方なども、それぞれ各大家によって若干異なるもののそれぞれ緻密な作法が定められて

いる。日本の(煎)茶道やほかの茶道の影響が非常に大きく、各大家は日本の(煎)茶道もたしなみがある人ばかりである。

また茶芸には、そこで提供する茶葉の美点を観客にアピールするとねらいもあった。一例をあげると、西湖竜井茶は四絶之誉「色緑、香郁、味甘、形美」を特徴とす[陸 2000: 82]。色緑、すなわち色は滑らかで艶のある黄緑色、形美形美、すなわち葉の形は細長く剣のように扁平であるものをよしとする。

一口にいえば中国茶全体にいえることであるが、淹れた茶の色、味、香りだけではなく、茶葉の色形の美しさの鑑賞も必要なのである。一説に日本の煎茶を味わう時は、「味と香り」に力点をおくため、茶葉を急須に入れる。それに対し、中国茶を味わうには、さらに茶葉の外観も重要なポイントであり、特に西湖竜井茶のように形の美しさを喧伝される茶では、西湖茶礼もまた茶葉の美しさを観客に味合わせるよう工夫されている。

茶芸における茶の淹れ方には、その茶のもっとも高品質をアピールするための細かい規定もつくられている。茶器(うつわだけではなく、茶壺などもはいる)も茶の種類によっておおよそのしきたりがあり、形の美しさを競う西湖竜井茶の場合は、ガラスのコップと茶器を用い、他の中国緑茶は蓋碗という大き目の式皿とふた月の杯で飲み、烏龍茶は、よく日本でも見かける工夫茶器(茶の猪口のようなちいさな杯)で淹れる。

例えば西湖竜井茶の淹れ方は、おおよそ以下の通りである。

湯を準備する。

茶器を盆の中に配置する。

両方の手を用いて盆のそとに茶筒をだす。

茶さじをテーブルの左側におく。

茶巾をテーブルの右側に置く。

両手を用いて、ふせていたガラスのコップをそれぞれ上に向ける。

手をそろえて一瞬動作を止める。このときも男性と女性では手の組み方が異なる。

茶さじを用いて、茶を半分に切断した竹筒の中に入れる。

茶を客人皆にまわしてみさせる。これを「賞茶」という。

茶を3つのガラスのコップに入れるために、3つに分割する。

ガラスのコップの中に入れる。

再び手をそろえて、一瞬動作を止める。

ガラスのコップの1/3ほどまでお湯を入れて、茶の葉をぬらす。このとき、コップの中の湯の温度は80℃前後が最適という。

手のひらの上にガラスのコップを置き、おおよそ3回、ガラスのコップを揺らす。これも客人に西湖竜井茶の良い香りをかがせるためであり、とくに「揺香」という名前がついている。

また手をそろえて、一瞬動作を止める。

次に「鳳凰 3 點頭」とよばれるガラスのコップに茶をそそぐ方法を用いるが、これは高所から鳳凰が 3 回お辞儀をするように、いきおいよく茶を注ぐ方法の雅名であり、茶を淹れる場合には、それぞれ「賞茶」など、動作の名前を最初に言う。すなわち茶芸師はひときわ大きな声で「鳳凰 3 點頭」という。このように、茶芸は演劇的要素としての見せ場が用意されている。茶芸師によっては、このとき漢詩や歴史上の故事を語る者もいる。

両方の手をそろえてガラスの皿のうえにのせた茶碗を客にささげる。

茶具を盆の上にしまって、さがる。

以上のような手順をふんで客人に茶を淹れる。器を用いて淹れる茶は、例えば温度が 90℃であったり、100℃であったりと異なっても、おおよそ同じような方法をとる。

西湖竜井茶を淹れる代表的な杭州の中国茶芸以外に、雲南の少数民族の茶芸や韓国茶道、日本茶道といった表演なども科目としてみとめられ³⁷、実技試験には、各茶館の経営者や芸関係者などが来場する。まさにそれは茶芸師の新人を発掘する場でもある(図 20)。

培訓班の意義について、培訓班を運営する浙江華韻職業技術学校の幹部は、茶芸師が国家労働部の認可を経て授与される国家資格であること、中国の茶芸は日本の茶道に比べて科学性を重視することに特色があること、中国の茶芸師は広く中国文化に通じ茶文化を外界として外国と交流することが必要であるとしている。杭州の地は毛沢東が西湖竜井茶を求めてたびたび訪ねた中国茶文化の中心地であるとして、まさに杭州で高級茶芸師を養成することにはたいへん大きな意味あるとも述べていた。また、別の幹部は、培訓班の意義について、1999 年に「茶文化」なる語が初めて中国茶界に登場したが、その裏面には中国経済の急成長があったと指摘している。いまや中国の茶飲料の生産高は 100 億元にのぼり、茶芸館の営業実績もまた 100 億元に達しており、茶文化について学ぶことは十分に現実的意味がある。また、文化とは、具体的にいえば茶器やサービスであり、茶文化とは茶業文化と言っても過言ではなく、茶業経済の交流手段のひとつとして、茶文化をとらえる必要がある。茶芸師養成の必要性は、こうした経済的側面をも併せもっていることを看過してはならないだろう。この幹部はこうも指摘している^②。

講習会初日の培訓班の存在意義に関するこうした説明の後、自然科学・人文科学をとわず、あらゆる方面から茶芸と茶館についての教育が行われる。教授陣の言からも、培訓班を通して、受講者たちに中国の茶文化全体に対する深い見識を教授し、国内外の観光客を

³⁷ 従来韓国人は茶をほとんど飲まないとされてきた。理由としては、李氏朝鮮王朝が仏教の隆盛を恐れたためであるとか、韓国は水が非常に美味しかったためにあえて茶を淹れて飲む必要がないこととか、日常生活の中では麦焦がしを引いたもので飲む茶が多いためであるとか諸説指摘されている。しかし浙江大学茶学系の大多数の留学生は、韓国出身であり、韓国では茶礼専門の大学の学科も存在している。現在の韓国茶道は仏教の影響が強く、男性の韓国茶礼の教師は仏僧を兼ねていることが多い[王家揚 2002: 9-10]。

立派に接待できる人材を育成しようとする意欲ないし責任感があることがうかがえる。それゆえ、培訓班の授業内容には、つねに観光客の視線と需要を意識しながら、そこには茶館の観光資源としての価値を高める意図が明確にみとれる。

さらに杭州では、国家資格以外の培訓班、例えば日本の茶道や煎茶道などもしばしば実施され、杭州市と友好都市である静岡市などから、日本茶道や煎茶道の教授有資格者・地元ないしそれに準ずる人物が派遣され、地元における茶文化・茶芸の普及向上に大きな役目をはたしている。日本茶道は中国茶芸と深い関連があるものとして、非常に重んじられている。中国茶芸の茶芸師は日本茶道の知識も求められている。

培訓班の教授陣には、茶葉貿易や観光業に深く関わった前歴を持っている事例もある。例えば、華韻職業専門学校の幹部で培訓班の副校長である阮浩耕氏(1938-)は、浙江省の紹興出身で、杭州市の公務員として茶葉の輸出業務に携わっていたが、文化大革命が終息後の1976年に中国茶文化研究を開始した。1982年に杭州市内に国営茶館茶人の家が設立され[孔1993: 169-171]、茶文化季刊雑誌「茶人の家」が誕生した後はその編集に携わった。そして現在「茶博覧」誌(1993年に「茶人の家」誌から改称)の編集長であり、『中国茶芸』『竜井茶文化』などの多くの著作を発表して注目されている。

培訓班の教授陣の張莉穎氏(1961-)が茶文化に関わるようになったのは、後に培訓班の教授を務め、浙江大学農学部茶学系出身で中国農業学研究所の教授であると同時に、『中国茶文化』『中国古代茶具』などを執筆した、著名な茶文化研究者でもある姚國坤氏(1937-)の招きにより、浙江国際茶文化研究会常設委員会の設立に関わったのが契機であった。

張莉穎氏は浙江省出身。杭州市の有名な外資系ホテルシャングリラに長年勤務し、英語と日本語に堪能で、外国人と交流する機会も多く、観光業界に多くの知人をもっている。現在杭州市内の有名茶館である西湖国際茶人村や黄龍茶館の経営者とも親しい。茶館に外国人観光客を誘致し杭州の茶文化をさらに対外的に発展させるためには、氏のような人材の存在が不可欠だろう。張氏自身も上記委員会の職と平行して杭州市内に茶館を経営し、茶文化の発展は張莉穎氏の人生のなかでの信念である。さらに、同委員会は、茶文化を、茶葉の輸出振興のみならず、中国伝統文化を対外的に宣伝し観光資源の一つとする計画を実施に移している。それにさらに加速をかけたのが、1991年に全国最大の国家クラスの総合的茶葉博物館である中国茶葉博物館(前述)が、杭州に建設されたことであった。また、茶葉博物館の研究員の大多数は前述の姚國坤氏をはじめ、浙江大学農学部茶学系出身で、浙江大学との交流関係も密接である。1993年に国際茶文化研究会常設委員会が発展的に解消して国際茶文化研究会が発足した。この研究会は、本部を中国茶葉博物館内に置き、陸羽誕生1260周年記念会、中国歴代茶文化国際學術討論会など、数多くの国際的な学術活動を運営してきた。浙江華韻職業技術学校による茶芸師培訓班も、同会の活動の一端である。

6-4 杭州市における茶館と茶文化の意義

4章において、北京を中心の事例として、現代の中国の茶館には、例えば老舎茶館のような劇場タイプの「茶館」と、改革開放以後に盛んになった高級喫茶店タイプの「茶芸館」の2つの類型がみられると述べたが、筆者が2002年から2003年にかけて調査した限りでは、杭州市内には老舎茶館のような劇場タイプの「茶館」はみられず、観光地に林立するのもすべて「茶芸館」タイプであった。中国側の研究者は、杭州市内の茶館の分類として、「都市茶芸館・農家レジャー茶室・地域茶室・茶テーマパーク・ホテルやレストラン内部の茶室」をあげているが、卑見によればいわゆる北京の老舎茶館のような劇場タイプの茶館は、杭州市内には存在しない。

これら杭州市内の茶館の経営者の多くは1960年代から1970年代生まれの比較的若い、1970年代末期の改革開放政策以後活動し始めた世代である。

改革開放以降の増加傾向にある茶芸館にたいして、中国の茶文化関係者は期待をもちはじめている。そこには、中国の茶文化をさらに広めるため、観光を発展させ、茶館・茶芸館増設を促進し、茶に関する高い素質の人材を養成し、茶葉博物館建設を中心にして茶文化を発展させる目的もみてとれる。さらに「茶芸館・茶芸は、茶文化を具体的に目に見える形にしたもので、茶を淹れることはひとつの芸術活動である」との定義もある⁽¹⁾。

一方、童啓慶氏(1934-)は、茶芸は、もともと一つの総合芸術であり、優雅で美しい場所で茶芸を披露することによって、中国の茶文化の宣伝をすることができるとし、茶芸館の社会的寄与や意義について、「中国の茶文化の宣伝の窓口であり、中国茶文化に対する知識を一般人へ教育する場であり、中国の漢民族・少数民族の茶芸の紹介も行い、外国人が中国文化を経験し国際理解を促進させる常設会場でもある」としている⁽²⁾。中国が著しい経済発展を遂げるなかで、茶芸館はことほどさように中国文化の発信台としての役割を期待されているのである。

次に、外国人との交流から、杭州市の観光と茶芸館の関係についてみてみよう。杭州市は、中国全国主要60都市の中で、外国人観光客数は上位6番目であり、数値の上からも中国の有名な観光都市といっても過言ではない(図24)。杭州の茶館は、観光客の集中する地区に多いこともあり、観光との関連性に触れる必要がある。観光都市杭州は、南宋時代の古都であった関係で、多くの歴史遺物を擁しており、これらが国内外から同市をおとずれる人々の観光スポットとなっている。杭州市を省都とする浙江省への中国人観光客は、表13に示したように、1995年に3590万、1996年に3773万(前年比5.1%増)、1997年に3997万(前年比5.9%増)、1998年に4200万(前年比5.1%増)、1999年に5100万(前年比21.41%増)、2000年に5870万(前年比15.1%増)と、確実に増大している[浙江省旅游局1999および2000: 見開き]。

一方、杭州市に限定してみても、国内外合わせた観光客数は、1998年に50万7200(外

国人 51.58%)、1999年に 59 万 1900(外国人 54.84%)、2000年に 70 万 7000(外国人 56.70%)、2001年に 81 万 9400(外国人 54.64%)、2002年に 105 万 620(外国人 59.80%)と、やはり 1999 年から 2000 年にかけて飛躍的に伸びている(表 14)。

外国人観光客に限定すると、1998年に 26 万 1400、1999年に 32 万 4600、2000年に 40 万 900、2001年に 44 万 7700、2002年には 63 万 1600 となり、それまでの 4 年間でじつに 2 倍以上にもなっている³⁸⁾。これら外国人のうち、最も多いのは韓国人と日本人で、2002年現在では韓国人が 15 万 8500、日本人が 11 万 8800 となっている。なお、1998年から 2002年までの両国からの観光客数は、韓国からの観光客が 1998年 2900、1999年 4 万 2800、2000年 6 万 8100、2001年 8 万 2600、2002年は 15 万 8500 となっており、日本からの観光客は、1998年 7 万 5500、1999年 7 万 9200、2000年 9 万 700、2001年 9 万 9800、2002年は 11 万 8800 と上昇している。とりわけ 1999 年から 200 年にかけての、両国からの著名な増加には顕著なものがある(図 25)。

1990 年代以降の改革開放政策のなかで、周知のように中国経済の発展はめざましいものがあるが、茶に関しても同様で、例えば、茶葉の産量は、前述したように、1992年には中国全体では 60 万 t であったが、2001年には 70 万 1700t と 10 万 t 以上も増加している。茶葉自体の増産と同時に、茶文化の宣伝もかつてないほど活発化しており、国内各地で国際茶葉節などの大規模な博覧会が開催され、当然茶芸館などのレジャー産業も発展しつつある。例えば杭州市には、店舗の面積が 1000 平方 m²以上の茶芸館だけで、2003 年現在 100 店以上存在している[中国茶葉流通協会 2003: 4-5]。

杭州市内に、新しいタイプの茶館すなわち茶芸館³⁸⁾が、さながら雨後の筍のように増加しはじめたのは、1993 年前後とされる。事実、市内の有名な茶館は 1995 年から 1996 年にかけての開業が多かった。2000 年以降、こうした傾向はさらに顕著となり、現在では大型茶芸館だけで 300 を数えるとされる³⁹⁾[郭航 2003: 18-19.]。茶館研究者によると、2003 年現在、概数 600 前後から 700 とみなされている[阮 2003b: 私信.]。茶館の使用料は、茶 1 杯とバイキングスタイルの点心(料理・菓子・果物)こみで、最低が紅茶の 1 杯 15 元、最高が高級西湖竜井茶など 1 杯 200 元であり、平均的客単価は茶と点心で 60 元-100 元³⁹⁾である。

茶館の経営者たちへの取材によると、茶館の客層は外国人観光客が大半を占め、他に茶関係の職業従事者(茶の研究者・販売者・別の茶館経営者)などであり、年齢層と性別はばらつきがみられるという。茶館の多くは、中国の古典的インテリアや茶器などで室内が調

³⁸⁾ 杭州には、新中国成立以前には、近郊を含めて大小 200 あまりの茶館があったが、新中国成立後、一部の西湖の風景名勝区以外の茶館は完全に消えてしまった。1970 年代後期以降現在まで、茶館は徐々に発展している[阮 1990: 132]。

³⁹⁾2003 年時点で、事務員の平均給与が 1 ヶ月 2000 元前後であった。

えられている。

茶館を経営するためには、法的に政府組織の飲食店経営・衛生などの許可を得なければならない。経営許可書には、茶館の名称・経営者の氏名・茶館の所在地・許可項目(茶館の場合は、「茶室」である)などが、明記されている。図 21 は衛生許可書の現物で、経営者の許可を得て個人情報消して掲載したものである。

杭州は風光明媚な西湖を中心とした有名な観光都市・別荘地である。浙江省全体の生活水準も比較的高く、中国の都市の中で杭州は例えば物価水準なども上位に属す(表 1)。齋藤美和子がかつて経済水準の進んだ地域に高消費の茶芸館が多いと指摘したように[齋藤 1998: 81]、杭州には茶芸館が多く、有名な店だけでも 20 あまり西湖の周辺を中心に林立して連日盛況を呈している。ほとんど 1990 年代後半に開業したものである。

なかでも有名なものは、西湖北西部の曙光路周辺と、南東部の南山路周辺に偏在している。両地域こそが、杭州市の中でもとりわけ美しく風景名勝区に指定された地区である。曙光路には、黄竜飯店・世貿中心・百合花飯店・シャングリラホテルなどがあるが、茶芸館も門耳茶坊・紫芸閣・風荷茶館など有名店が軒をつらねている(図 22)。南山路は整備された緑化地帯で、大型ホテルこそ少ないが、柳浪聞鶯・花港観魚・雷峰塔といった観光拠点が多く、茶芸館も西湖国際茶人村・茶人居・雷峰閣茶楼などやはり有名な店舗が多い(図 23)。これらの茶館はホテルとは独立したもので、ホテルやレストラン内部に開設された茶室はここでは含まれていないが、これらのことから、明らかに杭州市の景勝地に主な茶芸館が集まっていることがわかる。

これらの茶館の中で、南山路の西湖国際茶人村は、1994 年に設立され、1999 年と 2003 年に改増築された国営の茶館であり、前述した杭州市の茶人の家・中国国際茶文化研究会組織の外郭団体でもある。この茶館は全体が江南の古典的な建築様式で設計されており、館内の家具や調度品もまたクラシカルなものである。不定期に中国音楽の演奏会もおこなわれ、演奏会の有無に関わらず料金は茶が 40-200 円で平均 70 元前後、麺類などの点心は別料金で 30-50 元であり、客層はやはり 20-40 代くらいの外国人観光客などが多いが、杭州市の茶関係者も頻繁に訪問し、茶器の売買などをおこなっていた。現経営者の女性の前職はシャングリアホテル勤務であり、市内の各茶関係の組織・茶館と密接な人脈のつながりを持っていた。注目すべき点は、組織の関連書籍、例えば「茶博覧」(1990 年代に創刊された中国茶の専門雑誌)や中国茶文化茶芸の専門書を、自由に閲覧できるようになっていることである。点心のなかには、日本の落雁に似た味のものもあり、日本人客に好評とのことであった。この国営の茶館は、定期的な演奏会、古典的なインテリア、外国人客を意識した茶菓の選択など、典型的な中国文化の発信塔としての役割をはたしている茶館と、いえるだろう。

終章 中国茶文化における杭州の茶館の担う役割と、中国茶文化のグローバル ゼーションとの関係

本論文で論じたのは、唐代から宋代、清代、そして現代と中国歴史に、茶館を中心とする茶文化が連綿として継承されたこと、杭州市を中心にして栄えた宋代の茶文化、とりわけ闘茶が、同時代の周辺民族に伝播したこと、現代の杭州市の中国茶館の経営者従業員の再教育機関である評茶師・茶芸師講習会のこと、中国茶館と観光・茶葉貿易の関係、そして中国茶の世界的な普及と中国や浙江の茶葉貿易量の推移である。おそらく杭州の茶館について論じた論文は、本邦初と思えるが、では、中国浙江省杭州市がなぜ中国茶文化の中心地のひとつでありえたか。それには杭州市の歴史と観光戦略を注目する必要がある。茶葉博物館内に置かれた中国国際茶文化研究会や浙江省内の茶館などには観光業界で働いた人物も多く、杭州市の観光局や茶芸の関係者も茶文化は観光の一部分と考えている。杭州は、中国茶文化の基本形が完成した南宋時代の古都であり、中国緑茶の名品西湖竜井茶が生産され、清朝の乾隆帝や毛沢東など中国を代表する古今の為政者・政治家達が西湖竜井茶を愛し、杭州をたびたび訪問した都市である。これらの歴史的事実を、浙江大学農学部茶学系の設立、中国茶葉研究所の福建からの移転、国家的規模の初めての茶の博物館である中国茶葉博物館を建設などによって人々に再認識させ、また同博物館内の茶芸師培訓班も、杭州の観光シンボルのひとつとしての中国茶文化を實際面で担う人材を養成し、「茶の都」杭州としての地位を確立させた。杭州市は、中国が中国茶文化なる伝統文化のシンボルを内外に広めるための一つの文化都市である。そのかぎりにおいての中国茶文化における杭州の茶館の意義とは、中国茶文化が中国の伝統を内外に表示するためのシンボルであることを、端的に示すものといえよう。

もとより、茶は食生活と不可分の関係があるが、中国の茶文化は唐代から宋代への時代に流れのなかで徐々に普及していった。その普及の中核を担ったのが、本論で取り上げた茶館にほかならない。この茶館自体はすでに唐代から存在していた。だが、当初、皇帝を中心とする上層階級の独占物であった茶は、宋代に入ってその生産量が増大し、市民生活も何ほどか発展したこともあって、一般民衆にも好んで飲まれるようになったが、彼らにその重要な場を提供したのが、まさに茶館なのである。以後、茶館は中国茶文化の展開につねに重要な一翼を担い続け、連綿たる中国文化史のなかに、茶の意味と存在とを過不足なく刻み付けてきた。

1970年代末期からの改革解放運動による経済発展の中で、東アジア全体を巻き込んだ中国茶芸復興運動は、中国大陸も舞台となった。さらに1970年代末期、茶葉貿易が盛んになったことも拍車をかけ、杭州市は中国大陸の茶芸復興の中心地となり、茶芸館もまた日増しにふえていった。これらの状況に加え、2000年前後中国にも観光ブームがおとずれ、杭州への外国人観光客も増加したために、中国文化のPR施設としての茶芸館の需要が急

増した。

一方、茶芸館は、中国茶文化を目に見える形で、外国人観光客をふくめた一般の人々に啓蒙するための舞台であり、そこで働く茶芸師は茶を淹れる行為を通して、自国の誇るべき伝統文化を再確認する。それを実践するための都市として、南宋の古都であり、歴史上の施政者たちが愛した、銘茶西湖竜井茶の産地でもある杭州が選ばれたのは、けだし当然といえるだろう。杭州市、とりわけ西湖周辺の観光地に林立する茶芸館は、そうした中国茶文化を広く国内外に発信する基地ともいえる。

杭州市に中国の茶文化において、こうした特権的な地位を与えた要因とは何か。それには以下の条件があげられる。

①自然条件が茶の生産にとって好適であるので、杭州市では高品質の茶を生産することができる。

②かなりの人口規模を有し、しかも芸術・文化都市であるために、茶の消費量が多い。

③生活水準が高く、杭州市内での経済活動が盛んである。

④中国第一の経済都市上海に近く、物流が活発である。

⑤国家的な茶関連の諸組織が発達しており、学術方面からの手厚い支援がみられる(浙江大学農学部・研究所・中国茶葉博物館など)。それら諸組織は、外国人にも茶文化啓蒙活動を行っている。

⑥例年、恒例的な茶に関する行事・学会・展示即売品評会などの開催が、杭州市の後援をうけて盛んであり、外国人との交流も多い。

⑦茶文化に造詣の深い人物を排出しているため、茶の商品価値が高くなっている。

⑧そして、何よりも杭州市周辺で生産される西湖竜井茶(獅子・竜・雲・虎の4つの品質区分がある)が、古来から銘茶としての名声を得ている。

以上の諸条件が、茶葉の産業・文化を発達させると同時に茶館文化を活発化させたと考えられる。では、茶館の歴史的な位相ではなく、それが今日担っている機能は何か。これには以下の点が考えられるだろう。

①宣伝機能(国内外の観光客に中国茶文化や中国茶の特徴などを教授する)

②社交機能(友人との交際・クラブなど)

③芸術鑑賞機能(茶館の建築や庭園・インテリア・茶・茶具・茶芸・古典音楽など)

④余暇機能(将棋や囲碁の場)

⑤栄養機能

筆者はこうした茶館の今日的な機能が、中国茶文化のグローバル化に重要な役割を果たしたと考えている。本論を終えるにあたって、次にそのことをよくみておこう。

結論 茶文化とグローバリゼーション

中国および浙江省の茶葉生産量とその対日・米両国への輸出量の伸びについては、すでに本論前段で縷々紹介しておいたが、こうした展開を可能にした要因は、むしろ中国自体の改革開放経済政策のみならず、両国のすぐれて今日的な需要が決定的な役割を担っている。では、それはいかなる役割なのか。以下、とくに日本の状況とからめながらみておこう。

① 現在日本において、糖分をさげ身体によいものを摂取するという健康志向が、食事のときにペットボトル⁽¹⁾中国茶を選択する(図 32)理由として上昇している。

砂糖摂取が肥満・中性脂肪の増加・糖尿病発生への恐れ・虫歯発生の一大要素であることが一般の人たちにも容易に周知・理解されていることである。とくに近年、日常生活における虫歯発生や肥満への注意などの健康願望は、全国民あらゆる年齢層に浸透し、誕生後 3 歳までの保健所での母子健康相談と指導、義務教育世代の学校での健康教育と指導、さらに長じてはテレビ・印刷物によるメディアからの知識によって、日常生活のなかで最大関心事となっている。

また肥満の体形よりも痩身を美しいと考える、時代的な国民のとくに若者の希求が、糖分を含む飲料よりも無糖の茶を選択する傾向にあることも、みのがすことはできない。

唐代の陸羽によって書かれた『茶経』にも茶の効用について記述されている⁽²⁾が、現代でもこの数年来、日常飲料の緑茶の疾病予防効果がクローズアップされてきている。静岡県で開催された「2001 年国際 O-CHA 学術会議」で、茶成分のなかのカテキンの持つ抗菌作用が、胃癌の発生予防効果がある事が指摘され、緑茶生産地では胃癌による死亡率の低下傾向があると報告されている[村松 2002: 111]。また、厚生労働省の研究班による大規模な疫学調査で、茶をよく飲む女性では胃癌になるリスクが低くなっていることが、報告されている[中地 1998: 74-79]。

一方、茶には初期の虫歯に対する予防効果も認められており、その見地から飲料としてお茶を選択するようにすすめることが、保健活動の中で一般化されている。

こうした社会的な認識が広まると、茶消費の増大が見込まれると予想される。

② 1979 年前後に日本で缶ウーロン茶が普及し、その後、水筒代わりとして、時間と場所を問わない服用ができる簡便なペットボトルが、中国茶の消費量増大を加速化させた。

これに加えて、飲食に労力と時間をかけたくないという新しい食文化の要請や、ほかの人と同じ種類の飲料を消費して、そのことによって現代の流行を共有し、社会のなかでの自己の孤立化を阻止しようとする社会的表象が、携帯に便利なペットボトルの普及とあいまって、さらなる茶飲料消費の増加を生んだといえる(図 29・図 30・図 31)。

③ 歴史的な背景としては、1972 年からの日中国交正常化により、中国という隣国が、日本人にとってよりなじみの深い関係になったという事実がある。この結果、経済的な貨幣

価値の相違により、中国製品の安さからくる輸入品の増大をうみ、より日本人にとって消費しやすい中国産物を受け入れる社会的要因が生まれていることも、中国茶文化を受け入れやすくしている。

④近年日本では、海外への旅行が日本国内旅行よりも人気を得ており、とくに交通の発達とりわけ対中国間の航空機の乗り入れ頻度が増加したことにより、近隣の中国への観光旅行が容易になり、費用の少ない中国旅行への人気が高まっていることも、中国茶文化をうけいれやすくしている。6-4で述べたように、日本から杭州市への観光客も増加している(図25)。

こうした要因が、たとえばアメリカにどれほど当てはまるかは、詳細な検討を必要とする。だが、少なくとも中国茶文化のグローバル化が今日ほど隆盛をみている時代はかつてなかったと言ってよいだろう。そして、そのグローバル化の過程で、茶館が果たした役割もまた看過できない。

今後の課題としては、中国茶館の客層の分類や茶館料金などの調査をより具体的に進める一方、日本においてペットボトル・ウーロン茶が、いかに麦茶に代わって飲まれるようになったか、またそのことによって日本人の間にどのような形で「中国という表象」が浸透したかをより日常的な視点から記述し、より詳細な数字などのデータを有効利用して、グローバル化の視点から、中国茶文化普及に茶館が果たした役割や世界的戦略としての中国茶文化普及運動を、より立体的に論ずることなどがある。

最後に、これまで論じてきたことを大略以下のようにまとめて擱筆することにしたい。

①杭州市全体の自然条件・経済条件・歴史的条件・文化的条件が、中国茶文化の普及に適した土地であり、茶館文化が発達しやすい素地がある。

②茶館の発達によって、外国人観光客が増大した。

③外国人観光客の増大によって、茶館の経営者・勤務員教育機関である茶芸師・評茶師の講習会も発足した。

④杭州市の茶葉産業について調査を行なった結果、杭州の茶館の発達が茶葉産業の進展を助け、茶葉輸出業の増加をもたらしている。

⑤茶葉輸出業の増加が、また茶館の発達や諸講習会の発展に加速化させた。

⑥茶館の目的のひとつに、外国人への中国茶文化伝達がみられる。

⑦日本を含む各国の飲料消費量の実態について、多様な数値を調査した結果、飲料水の中で中国茶の消費量の増大が、年代とともに見られ、これにともなって中国茶の輸入量の増加が認められた。

⑧日本においても、かつての麦茶の地位を中国茶(ペットボトル・ウーロン茶が主流)が凌駕している。

⑨その背景として、糖分を控えたいという健康志向、肥満よりも痩身を好むという一般的な現象、茶成分の効用のクローズアップなどがあげられる。

⑩結果として、日本人にとって中国茶はありふれたものとなり、日常生活において「中国」という表象をうち出している。

⑪中国茶の輸出量の増加と、日本を含む各国の消費量の増加は、中国茶の他国への増加の実態を裏打ちしている。

⑫これら数値の裏づけから、現在世界に中国茶文化のグローバリゼーションが進展していると考察することも可能である。

⑬中国茶館の主な機能の中に、外国人観光客への中国茶文化・茶芸を普及させることがあげられる。杭州市における中国茶館の発達、浙江省のアメリカ・日本への茶葉輸出の増大と日本における中国茶消費量の増大は、1990年代後半というほぼ同一時期に興っている。

現在、杭州市における中国茶館の発達と、日本人の中国茶消費量の増大を直線的に結ぶ数値データはあげられなかったが、以上の傍証によって、中国茶館の発達が中国茶文化のグローバリゼーションに寄与していることが示唆されたと思われる。